

正直古墳群調査保存事業

正直古墳群

—第3次発掘調査報告—

令和2年3月

福島県郡山市教育委員会

正直古墳群調査保存事業

しょう じき こ ふん ぐん
正 直 古 墳 群

—第3次発掘調査報告—

令和2年3月

福島県郡山市教育委員会

序 文

郡山市内には埋蔵文化財包蔵地として1,183箇所が福島県埋蔵文化財包蔵地台帳に登録されています。このことは、古くからこの地に人々が生活を営み、人やもの、情報などの交流が継続して執り行われてきたことを物語っております。しかし、近年の開発によって消滅の危機に瀕する遺跡もあり、大地に刻まれた歴史と言える埋蔵文化財を保護するために、試掘調査及び発掘調査を行い、遺跡の保護・保存を図っているところです。

正直古墳群は、市内でも重要な遺跡の一つであり、現在は40余基の古墳が確認されており、往時は50基以上の古墳が群を成していたと考えられております。昭和24年から開畑時の発見や宅地造成に伴って古墳の調査が随時行われ、その成果から、古墳時代中期の概ね5世紀代を中心とする古墳群として評価を受けてまいりました。しかし、近年の開発により未調査のまま消失したのもや一部欠損してしまった古墳もあり、古墳の保護・保存が喫緊の課題となっているところです。

こうした状況の下、古墳群の保護・保存を図るため、平成29年度から国庫補助事業として、古墳群の内容把握や実態解明のために、古墳群の中で中核とされる古墳の調査を進めているところです。今年度は、古墳群の中では最大規模で、最も古い築造とされる前方後方墳形の正直35号墳の発掘調査を行い、墳端の一部を確認することができました。来年度も引き続き35号墳の調査を進めてまいります。

本書は、令和元年度の調査成果を第3次発掘調査報告としてまとめたものでありますが、多くの皆様に広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助となりますことを願うところです。

結びに、調査にあたり多大なる御協力を賜りました地権者の皆様、田村町正行政区長様、地元の皆様、発掘調査に従事されました皆様方、発掘調査に御指導をいただきました正直古墳群の調査保存に係る懇談会の委員の皆様様に厚く御礼を申し上げます。

令和2年3月

福島県郡山市教育委員会
教育長 小野 義 明

調 査 要 項

遺 跡 名	正直古墳群（しょうじきこふんぐん）
所 在 地	福島県郡山市田村町正直字南・北畑・宮前・広町・中平・除古・新館・竹ノ内ほか
調 査 期 間	令和元年9月12日～令和元年12月16日
調 査 主 体 者	福島県郡山市教育委員会（教育長 小野 義 明）
調 査 担 当 者	公益財団法人郡山市文化・学び振興公社（代表理事 佐久間政彦）
調 査 保 存 懇 談 会 委 員	菊 地 芳 朗（国立大学法人福島大学行政政策学類教授） 藤 沢 敦（東北大学総合学術博物館館長） 柳 沼 賢 治（国立大学法人福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任教授） 玉 川 一 郎（福島県考古学会会長）
指 導 機 関	文化庁 福島県教育庁文化財課（渡 邊 貴 勝）
調 査 員	高 田 勝
調 査 補 助 員	吉 田 イ チ 子 橋 本 明 子
助 言	青 山 博 樹 笠 井 崇 吉 木 幡 成 雄 鈴 木 功 本 間 宏 吉 田 秀 享
協 力	三 本 木 正 幸 三 本 木 義 之 正 直 利 一 山 口 守

例 言

1. 本書は、福島県郡山市田村町正直字南・北畑・宮前・広町・中平・除古・新館・竹ノ内ほかに所在する正直古墳群の調査保存事業に係る第3次発掘調査報告書である。
2. 正直古墳群は、正直B遺跡の範囲内に点在するため「福島県遺跡地図」(1996 福島県教育委員会)には同遺跡名で登録されている。しかし、昭和39年に刊行された「福島県史」第6巻資料編1に「正直古墳群」として登場し、昭和47年に刊行された「郡山市史」第8巻資料編(上)においても同名称が継承されている。また、関係者の間では現在もこの名称が広く使われており、今回この名称を用いることとした。
3. 本調査は、郡山市と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社との間に締結された委託契約に基づき、公益財団法人郡山市文化・学び振興公社が実施した。
4. 現地調査から報告書刊行までの費用は、国庫補助金と市費より成る。
5. 本書は、公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センターが編集し、郡山市教育委員会が発行した。
6. 本書の執筆は、第2章第1・4節を郡山市文化スポーツ部文化振興課の斎藤直子が担当し、第1章第2節は文化振興課の佐藤常雄と高田が、その他は高田が行った。但し、第1章第2節のうち、正直古墳群の調査概要については、図を含めてその多くを平成8年度に刊行された「正直B遺跡-発掘調査報告書-」から転載し、正直15号墳の部分のみ高田が行った。
7. 本書に掲載した遺構図・遺物図は、高田と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター臨時職員の吉田イチ子・橋本明子・今泉淳子が作成した。
8. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は高田が撮影した。また、空中写真は株式会社ふたばの協力を得て、同社の支援事業者であるFiveStarがドローンで撮影した。
9. 本書に掲載した1/50,000地形図(第1図)は、国土交通省国土地理院発行の地形図を複製したものである。また、1/5,000地形図(第2図)は、国営総合農地開発事業母畑地区の計画平面図(1/1,000)を縮小複製したものである。
10. 測量基準杭の座標値は、世界測地系平面直角座標第IX系による。また、遺構図の方位は、座標北を示す。
11. 調査に関わる記録・資料・出土遺物は、郡山市教育委員会が保管する。

目 次

序 文
調査要項
例 言

第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の経緯	21
第1節 調査に至るまで	21
第2節 第1次発掘調査の目的と成果	22
第3節 第2次発掘調査の目的と成果	23
第4節 測量調査の方法と経過	25
第5節 第3次発掘調査の経過	25
第3章 調査報告	32
第1節 後方部斜面	32
第2節 前方部斜面	46
第4章 まとめ	52

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 正直古墳群の位置と市内の主要古墳時代遺跡	3・4
第2図 正直古墳群・正直B遺跡と周辺の地形	11・12
第3図 正直11・12・13号墳	13
第4図 正直30・36号墳(1)	14
第5図 正直30・36号墳(2)	15
第6図 正直35号墳	16
第7図 正直15号墳(1)	17
第8図 正直15号墳(2)	18
第9図 第1・2次発掘調査終了後の正直20・21・43号墳	24
第10図 正直35号墳測量図	27・28
第11図 正直35号墳トレンチの配置と遺構	29・30
第12図 第1トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図	33・34

第13図	第1トレンチ出土遺物(1)	36
第14図	第1トレンチ出土遺物(2)	37
第15図	第2トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図	39・40
第16図	第2トレンチ出土遺物	42
第17図	第3トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図	43・44
第18図	第3トレンチ出土遺物	45
第19図	第4トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図	47
第20図	第4トレンチ出土遺物	48
第21図	第5トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図	50
第22図	第5トレンチ出土遺物	51

写真図版目次

図版1	正直古墳群の位置(国土地理院の空中写真 1947 米軍空撮)
図版2	(1) 正直古墳群遠景・正直B遺跡(南より) (2) 正直古墳群遠景・正直B遺跡(北より)
図版3	(1) 正直35号墳遠景(南より) (2) 正直35号墳全景(上空より・上方北)
図版4	(1) 第1トレンチ全景(北より) (2) 第1トレンチ墳頂部盛土断面(東より) (3) 第1トレンチ西壁断面(北東より) (4) 第1トレンチ斜面部盛土断面(北より)
図版5	(1) 第2トレンチ全景(東より) (2) 第2トレンチ北壁断面(南東より) (3) 第2トレンチ1号遺構(南より) (4) 第2トレンチ斜面部盛土断面(東より)
図版6	(1) 第3トレンチ全景(西より) (2) 第3トレンチ墳頂部盛土断面(南西より) (3) 第3トレンチ北壁断面(南西より) (4) 第3トレンチ斜面部盛土断面(西より)
図版7	(1) 第4トレンチ全景(東より) (2) 第5トレンチ全景(西より)
図版8	(1) 第5トレンチ北壁断面(南西より) (2) 正直35号墳トレンチ埋戻し後遠景(西より)
図版9	出土遺物(1)
図版10	出土遺物(2)

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

遺跡の所在する郡山市は、福島県のほぼ中央部に位置する。市域の東西は、阿武隈山地西縁丘陵地から奥羽山脈中の猪苗代湖南東部におよび、中心市街地は郡山盆地内にある。人口33万人余りを数える県内屈指の商・工業都市で、平成9年4月1日から中核市へ移行している。気候的には、比較的穏やかな内陸性の気候であるが、奥羽山脈中の湖南町や熱海町西部は冬季間の積雪量がかなり多い。

市街地のある郡山盆地は、安達郡大玉村・本宮市付近から須賀川市・白河市付近まで続く南北に長い山間盆地の一部である。この盆地は、第三紀末のグリーンタフ造山期に阿武隈山地と奥羽山脈との間に起こった相対的沈降作用によって形成されたもので、縁辺に断層も認められることから断層盆地の特性も併せ持つ。基盤は、花崗岩類とそれを覆う第三紀層並びに白河石英安山岩質溶結凝灰岩から成り、盆地床の一部でこの基盤は300～400m高度の丘陵地を形成している。

盆地内を南北に貫流する阿武隈川は、西の奥羽山脈から笹原川・逢瀬川・藤田川・五百川、東の阿武隈山地から谷田川・大滝根川・桜川などの支流を集めて盆地東縁部を北流している。これらの大小河川の浸食・堆積作用により、盆地の大半を占める西岸の地域では上・中流域に緩やかな傾斜の扇状地が発達し、下流域では東西方向に伸びる複数列のなだらかな台地を形成している。また、東岸では南東部の阿武隈川と谷田川に挟まれた地域に段丘地形や沖積低地をみることができ、谷田川東岸の田村町大善寺以北では、阿武隈山地に続く丘陵が樹枝状に開析され、複雑な地形を形成している。

今回調査を行った正直古墳群は、郡山市田村町正直に所在し、JR郡山駅の南約6kmに位置する。付近は郡山盆地の南東部にあたり、西側を阿武隈川、東側を谷田川が流れ、北側には両河川によって形成された沖積低地が広がっている。古墳群は、両河川に挟まれた通称守山台地と呼ばれる砂礫台地の北端を占める正直B遺跡と複合し、標高約240～250mの上～中位段丘面に築造されている。北側には沖積低地が広がり、東と西は沖積低地から入り込む開析谷に画されている。現地目は、山林と畑地である。

第2節 歴史的環境

昭和50年代以降、郡山市内においては、郡山東部地区の国営総合農地開発事業や東北自動車道・東北新幹線の建設、大規模な土地区画整理事業や多目的公園の建設等の大型開発に伴い、遺跡の発掘調査が進められ、数多くの貴重な資料が蓄積され、古墳時代の遺跡の広がりや時間的な推移が具体的に解明されてきている。ここでは、市内で発掘調査された古墳時代の遺跡を中心にその概要を記す。

東丸山遺跡 安積町成田字東丸山・清水台 註1

ほ場整備事業に伴い、昭和49年度に発掘調査が行われた。また、昭和59・60・62年度には、多目的公園「郡山カルチャーパーク」建設に伴い、大規模な発掘調査が行われた。両調査では、前期6棟、後期

第1章 位置と環境

中葉2棟、同後葉20棟の竪穴住居跡の他、縄文時代前期や平安時代の竪穴住居跡が検出されている。また、東西約100m、南北約60mの範囲から、前期の方形周溝6基、前～中期の土坑墓4基、中～後期の円形周溝墓6基が発見され、9号方形周溝墓からは、前期に比定し得る鉛製のペンダント（東日本では最古の鉛製品と推定）が出土している。

山中日照田遺跡 田村町大善寺字中山田 註2・3

大善寺古墳群と複合する遺跡である。国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、昭和56年度に大規模な発掘調査が行われた。また、平成10年には、無線基地建設に伴って小規模な発掘調査が行われた。昭和56年度の調査では、前期の竪穴住居跡40棟の他、中・後期、奈良・平安時代の竪穴住居跡などが多数検出されるとともに、前期の方形周溝墓や円形周溝墓も発見されている。また、平成10年の調査では、中期後葉の竪穴住居跡が2棟検出されている。山中日照田遺跡は、古墳時代前・中・後期を通して阿武隈川東岸地域の拠点的な集落跡と考えられている。

北山田遺跡 田村町上行合字北山田・中山田 註4～7

北山田古墳群と複合する遺跡である。公立学校敷地拡張工事に伴い、昭和60年度に発掘調査が行われた。また、昭和62・63年度には、国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、大規模な発掘調査が行われた。昭和60・63年度の調査では、古墳時代の遺構は確認されなかったが、同62年度の調査では前期5棟、中期9棟の竪穴住居跡が検出されている。いずれの調査区でも古墳の所在が確認されたことから、昭和60年度は古墳1基、同62年度は古墳2基、同63年度は古墳3基の調査が併せて行われている。

宮田A遺跡 田村町上行合字宮田 註8

国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、昭和59年度に発掘調査が行われた。前期の方形周溝墓1基と中期中葉の方形周溝墓1基の他、方形周溝墓の可能性のある溝跡、時期不明の掘立柱建物跡や井戸跡などが検出されている。

徳定A・B遺跡 田村町徳定字塚ノ越・芋干場 註9～12

東北新幹線敷設工事に伴い、昭和47・49・50年度に発掘調査が行われた。また、平成17・20～24年度には、土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われた。両調査で検出された遺構の多くは、後期前半と奈良・平安時代の竪穴住居跡であったが、土地区画整理事業に伴う平成24年度の第6次調査では、前期の竪穴住居跡が2棟発見されている。

上之内遺跡 富久山町福原字上之内・陣場 註13

民間の宅地造成工事に伴い、平成7年度に発掘調査が行われた。前期の竪穴住居跡2棟の他、中世の集水遺構、溝跡、ピットなどの遺構が検出されている。

清水内遺跡 大槻町字人形垣東・上中谷地・中谷地、御前1・5・6丁目 註14

土地区画整備事業に伴い、平成7年度から同10年度にかけて大規模な発掘調査が行われた。前期1棟、鍛冶工房跡7棟を含む中期106棟の竪穴住居跡の他、奈良・平安時代の竪穴住居跡や中世の屋敷跡などが検出されている。また、中期の祭祀関連遺構として、一辺の長さが最大52mを測る矩形の区画遺構や祭祀遺物廃棄場、旧河川跡の祭壇状木組み遺構などが検出されている。中期の竪穴住居跡は、カマドの有無や出土した土師器の組成などから前・中・後葉の3時期に分けられ、前・中葉が主体を占める。清水内遺跡は、阿武隈川西岸における中期の中心的な集落跡と考えられている。



第1図 正直古墳群の位置と市内の主要古墳時代遺跡

大根畑遺跡 安積町荒井字大根畑 註15・16

土地区画整備事業に伴い、昭和62年度から平成3年度にかけて発掘調査が行われた。4次わたる調査で、主に後期前半と奈良・平安時代の竪穴住居跡が確認されている。平成元年度に行われた第3次調査では、中期前葉の竪穴住居跡も2棟検出されている。

永作遺跡・南山田遺跡 田村町手代木字永作、田村町上行合字南山田 註17～19

両遺跡は、ともに国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、大規模な発掘調査が行われた。昭和61年度の永作遺跡の調査では、中期後半の竪穴住居跡が30棟検出されている。また、平成元年度の南山田遺跡の調査では、同じく中期後半の竪穴住居跡が78棟発見されている。鉄滓・羽口・伊・鍛造剥片などがみつかった竪穴住居跡が、両遺跡ともに2棟ずつあり、これらは鍛冶工房跡と考えられている。また、永作遺跡では、1棟の竪穴状遺構から石製模造品の原石や作りかけの剣形石製模造品が出土しており、この遺構は石製模造品の製作用工房跡と考えられている。さらに、両遺跡では、この時期としては珍しい須恵器が比較的多く出土している。同一丘陵上に隣接して所在する永作遺跡と南山田遺跡は、主たる遺構の時期や内容がほぼ同じであることから、中期後半における阿武隈川東岸地域の中心的集落跡のひとつと考えられている。

正直A遺跡 田村町正直字薮沼 註20・21

古くから石製模造品が採集され、正直祭祀遺跡として知られた遺跡である。国営総合農地開発事業母畑地区に伴い、平成4年度に大規模な発掘調査が行われた。中期後半58棟、後期後半1棟の竪穴住居跡の他、奈良・平安時代の竪穴住居跡などが検出されている。中期後半の竪穴住居跡の中には、大量の石製模造品やその未成品・剥片などが出土したものが1棟あり、この遺構は石製模造品の工房跡と考えられている。また、屋外で土師器や石製模造品が集中して出土した地点が3か所検出され、これらは中期後半の祭祀跡と考えられている。正直A遺跡は、正直古墳群と同一台地上の南西至近距離にあり、同古墳群の築造に関わる集落のひとつと考えられている。

太田遺跡 大槻町字太田北・北地藏谷地 註22

昭和35年頃に遺跡の一部が開田され、その際多量の土師器が出土した。その破片の一部にモミ痕が観察されたことで、注目された遺跡である。県営ほ場整備事業に伴い、昭和48年に発掘調査が行われた。検出された遺構は竪穴住居跡11棟のみで、これらは1棟を除いて後期前半と考えられている。

丸山遺跡 安積町成田字丸山 註23

多目的公園「郡山カルチャーパーク」の建設に伴い、昭和62年度に大規模な発掘調査が行われた。後期前半の竪穴住居跡16棟の他、平安時代の竪穴住居跡や縄文時代前期の土坑などが検出されている。

三ツ垣古墳群 静町 註24

開発工事による削平を受けて、昭和59年2月に1・2号墳の緊急発掘調査が行われた。トレンチ法による墳丘と周溝の部分調査であったため主体部は確認されなかったが、周溝の状況と1号墳出土遺物から、ともに一辺16m前後の前期の方墳と考えられている。調査は行われなかったが、他に4基の円形周溝も確認されている。

大安場古墳群 田村町大善寺字大安場 註25・26

平成6年度の測量調査を受けて、平成8年度から同16年度にかけて保護・保存に向けた発掘調査が行

われた。前期後半の大型前方後方墳1基と中期後半の円墳4基が確認され、前方後方墳が国の史跡に指定されたことを契機として復元整備が進められ、現在では史跡公園となっている。前方後方墳である1号墳は、全長約83m、前方部2段、後方部3段の築成で、丘陵の先端を一部整形して構築されている。主体部は、長軸約10m、短軸約2mの長方形墓壇底面に粘土を貼って棺床としており、長さ約9m、幅約1mの割竹形木棺が安置されたと推定されている。副葬品は、腕輪形石製品、鉄大刀、鉄槍、鉄剣、鉄鎌、鉄斧、剣形鉄製品、刺突具状鉄製品などが出土している。他に墳頂部やぐびれ部などから多数の底部穿孔壺が出土しており、これらは墳頂部に立て並べられたと考えられている。2号墳は径約15mで、墳頂西寄りから組み合わせ式の箱式石棺が確認されている。5号墳は径約12mで、主体部は未確認である。3・4号墳は半部分以上が開発行為により大きく削平されているが、周溝の形状等から円墳と推定されている。1号墳は規模や出土品から、この地方の首長クラスの墳墓と考えられている。

大善寺古墳群 田村町大善寺字上野・上石切場 註27

山中日照田遺跡と複合する古墳群である。昭和20年代のはじめ頃、数基の古墳が発掘調査され、骨髄などが検出されている。昭和47年には、郡山市教育委員会により削平された古墳の発掘調査が行われ、箱式石棺の主体部と人骨の一部が検出されている。また、山中地区では、耕作中、盛土を失った古墳から数振の直刀が掘り出されている。台地の周縁を取り巻くように古墳群が形成されており、中には埴輪を立てた古墳もあったようで、これまでに4か所の地点で中期後半の埴輪が採取されている。現在確認できる古墳は、墳丘が僅かに遺存するものや石室が残るものなどが数基のみとなっており、以前出土した土器や聞き取り調査の結果の他、山中日照田遺跡として調査した周溝墓群を加えれば、前期古墳から横穴式石室をもつ後期古墳まで、各時期の古墳が存在していた可能性が高い。

阿弥陀壇古墳群 大槻町字柏山 註28

土地区画整備事業に伴い、昭和53年度に発掘調査が行われた。当初は、墳丘が確認できた3基を調査する予定であったが、周溝のみが遺存するものが新たに2基発見され、最終的に方墳1基と円墳4基の調査となった。各古墳の時期は、方墳が中期前半、円墳が後期と考えられている。1号墳は一辺25m前後の方墳で、主体部は墳頂北寄りで検出された。竪穴式の墓壇内に棺の痕跡が確認できなかったため、直葬と考えられている。3号墳は、径約14mの円墳である。主体部は横穴式状で、壁面に粘土で構築した玄室に木棺が納められたと考えられている。6号墳は径18m前後の円墳で、主体部は掘方のみが検出された。凝灰岩の破片が多数出土したことから横穴式石室と考えられている。4・5号墳はどちらも墳丘が削平され、周溝のみが検出されている。径18～20m前後の円墳と推定されている。

北山田古墳群 田村町上行合字北山田・中山田 註29～32

北山田遺跡と複合する古墳群である。13基確認されている。公立学校敷地拡張工事に伴い、昭和52年度と同60年度に発掘調査が行われた。また、昭和62・63年度には、国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、大規模な発掘調査が行われた。方墳1基（1号墳）、帆立貝形古墳1基（2号墳）、円墳5基（3・4・10・12・13号墳）の計7基が調査されている。帆立貝形古墳は全長約24mで、主体部は2棺並列の木棺直葬、時期は中期中葉頃と考えられている。一辺10m前後の方墳は、周溝や主体部は検出されなかった。中期後半以降と推定されているが、盛土から鉄鎗やロクロ土師器がみついていることから、後世の塚跡との指摘もある。5基の円墳は径約14～21mで、いずれも帆立貝形古墳築造前後の時期

が想定されている。未調査の古墳6基は、現況ですべて円墳と推定されている。

南山田古墳群 田村町上行合字南山田 註33・34

南山田遺跡と複合する古墳群である。国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴う南山田遺跡の発掘調査の際に、中期の円墳1基(南山田1号墳)と円形周溝3基が検出されている。円墳は径16m前後で、主体部は検出されなかった。周溝から、小型脚付把手付壺と呼ばれている陶質土器に似た特殊な土器が出土している。現在は、かぶつ壇古墳と呼ばれている円墳が1基遺存しているが、隣接する桜ヶ丘団地造成時に複数の古墳が破壊されたという聞き取りがある。

中山田古墳群 田村町大善寺字中山田 註35

細い谷を挟んで大善寺古墳群の北東に位置する古墳群である。径10～20m程度の円墳が11基確認されているが、発掘調査が行われていないので詳細は不明である。

妻見塚古墳群 田村町手代木字妻見塚 註36

妻見塚遺跡と複合する古墳群である。径10m前後の円墳が10基確認されている。中には、天井石や門柱石が露出しているものがあることから、横穴式石室を伴う後期の古墳群と考えられている。国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、昭和60年度に妻見塚遺跡として発掘調査が行われた地区で、石室の底石と考えられる石組が2か所検出されている。

樹壇古墳群 田村町下行合字朝日舞 註37

下永田B遺跡と複合する古墳群である。径10m前後の円墳が11基確認されている。県道飯豊郡山線建設工事に伴い、昭和60年度に下永田B遺跡として発掘調査が行われた地区で、天井石と周溝のみが遺存する古墳が1基検出されたことから、横穴式石室を伴う後期の古墳群と考えられている。

御代田古墳群 田村町御代田字中林 註38

径10m前後の円墳が9基確認されている。昭和30年に、福島考古学会によりすでに露出していた横穴式石室の発掘調査が行われ、耳環1点と石製模造品が出土している。後期の古墳群と考えられている。

カガヤ坦古墳群 田村町守山字カガヤ坦 註39

22基の古墳が確認されている。発掘調査が行われていないので詳細は不明だが、方墳1基を含み、小型の前方後円墳ないし前方後方墳らしい高まりもみられる。時期は、前期～中期と考えられている。

福楽沢遺跡1・2号墳 大槻町字蝦夷坦 註40

弥生土器の散布地として注目され、昭和44年度に遺跡の内容把握のため行われた試掘調査の際に、隣接する複数のトレンチにまたがって検出された。両古墳ともすでに墳丘は削平されており、1号墳では径10m前後の周溝と横穴式石室の基底部分が調査され、2号墳では周溝の一部のみの発掘となった。両古墳の時期は、後期後半と考えられている。

妻塚古墳 大槻町字妻塚 註41

市の重要遺跡の記録保存を目的として、昭和35年に発掘調査が行われた。周溝の有無は確認されていないが、出土した埴輪の配列などから全長26m前後の前方後円墳と推定されている。主体部は、盗掘坑や一字一石経を埋納した経塚により大きく破壊されていたが、僅かに残る石室内から直刀片、耳環、鉄鈿など、墳丘中から円筒埴輪や家形・人物・器財などの形象埴輪が出土している。時期は、後期前半と考えられる。

測ノ上1・2号墳 安積町笹川 註42

阿武隈川上流改修工事に伴い、昭和46年度に行われた測の上遺跡の発掘調査の際に検出された。両古墳ともすでに墳丘は失われており、1号墳では周溝の一部と横穴式石室の基底面が調査され、2号墳は横穴式石室の基底面のみの発掘となった。玄室の平面形はともに胴張気味で、1号墳からは頭椎太刀や鉄製冑とそれに付属する小札などが出土している。時期は、後期後半と考えられている。

守山城跡三の丸1号墳 田村町守山字三ノ丸 註43

小学校体育館増・改築工事に伴い、平成22年度に行われた守山城跡の第5次発掘調査の際に検出された。墳丘はすでに失われており、横穴式石室の基底面と周溝の一部が調査された。石室底面から須恵器高坏・土製丸玉・土製勾玉・耳環・刀子・鉄鈿などが、周溝から円筒埴輪・須恵器甕などが出土している。周溝の半部以上が調査区外となっているため墳形は確定できないが、全長20m以上の前方後円墳と推定されている。時期は、後期前半と考えられている。

大槻古墳群 大槻町字西ノ宮西・新池下・御花畑 註44

すでに消滅した古墳群である。長くその位置や数が不明であったが、昭和13年に作成された分布図が公開された。この分布図には、多数の古墳とともに現在も位置を変えずに残っている池や道路も描かれている。また、前記した三ツ坦古墳群、阿弥陀壇古墳群、福良沢1・2号墳などの発掘調査が行われた古墳も記載されていることから、当時の古墳分布の様子をかなり正確に示している。これによれば、現在の大槻町字西ノ宮西・新池下・御花畑辺りに100基前後の古墳があったとみられる。なお、この分布図には、詳細は不明ながら昭和45年に1基の調査が行われた堂山古墳群、現在では宅地化により墳丘が確認できない柴宮山古墳群なども記載されている。

針生古墳 静町 註45

多数の古墳が消滅した大槻地区の中で、破壊を免れた古墳として郡山市の史跡に指定されている。昭和25年に発掘調査が行われているが詳細は不明である。後期の円墳と考えられている。

蒲倉古墳群 蒲倉町字カチ内・横川町字大谷地ほか 註46～52

古墳群の内容把握のため、昭和47年度に一部の古墳の発掘調査が行われた。また、平成3年度には、古墳公園として保護・保存・整備・活用を図るため、分布調査・試掘調査が行われた。さらに、平成9・10・11・12・19・20年度には、基礎資料収集を目的として合計21基の発掘調査が行われた。これらの調査により、墳丘が遺存していないものも含めて71基の所在が確認され、径5～10m前後の円墳群であること、主体部が遺存するものは横穴式石室であること、追葬が行われたものがあること、追葬時に石室の前で火を焚いたものがあることなどが明らかとなった。築造時期は、後期後半と考えられている。

西の内古墳群 蒲倉町字西の内 註53

蒲倉古墳群の北東約500mの丘陵上に位置する。現在、10基の存在が確認されている。発掘調査が行われていないので詳細は不明であるが、墳丘規模や石室の状況が蒲倉古墳群と類似していることから、同古墳群とほぼ同時期の築造と考えられている。

蝦夷穴横穴墓群 田村町小川字下田 註54

市内唯一の横穴墓群である。市単独農道改良工事に伴い、平成13年度に発掘調査が行われた。横穴墓は以前から11基確認されていたが、この調査では、法面工事で新たに発見された2基と墓群前面の農道

部分が対象となった。2基の横穴墓はともに盗掘を受けていなかったため、玄室内から方頭太刀、太刀、刀子、鉄鎌、ガラス製小玉、鉄鈎などが出土している。農道部分では複数の溝跡が検出され、これらは墓域を区画する溝や横穴墓に通じる墓道と考えられている。時期は、後期後半と考えられている。

正直古墳群 田村町正直字南・北畑・宮前・広町・中平・除古・新館・竹ノ内ほか 註55～60

正直B遺跡と複合する古墳群である。昭和39年に初めて分布図が作成され、これにより墳丘を失った古墳2基を含めて35基が知られた。その後、昭和56年度の30号墳発掘調査、平成3年度の35号墳測量調査・分布調査、同7年度の15号墳発掘調査の際に、新たに確認された古墳が追加され、現在では43号まで番号が付けられている。これらは、前方後方墳1基、方墳数基と円墳で構成され、築造時期は前期～中期とみられている。発掘調査が行われたもの、未調査のまま墳丘を失ったものなどが含まれているが、現在では墳丘ないし墳丘状の高まりが観察できるものは23基といわれている。発掘調査が行われた古墳は、9・11～13・15・18・23・27・30・36号墳の10基で、このうち9・18号墳については当時の記録等の所在が不明である。11～13・23・27・30・36号墳の調査概要については、15号墳の調査報告が掲載されている「正直B遺跡－発掘調査報告書－」の第1章第2節で詳しく述べられているので、以下に図を含めてその部分を抜粋・転載する。また、15号墳の調査概要については新たに付け加える。

正直11・12・13号墳（第3図）は、昭和51年に個人の宅地造成に伴って郡山市教育委員会が調査した。11・12・13号墳は正直古墳群の中でも多数の古墳が密集する南ブロック西端の開析谷面に位置している。3基の中では最も西に位置する11号墳は、周溝幅を含めない内寸規模が9.5mの円墳で、箱式石棺の残欠が田表土の上面から検出された。主体部から遺物は出土していないが、周溝内から南小泉式中～後半段階の土師器環・埴が得られている。中央に位置するのが12号墳で、内寸の規模・形状は11号墳と同様であるが、古墳の遺存状態が悪かったため、主体部は検出されていない。周溝内から南小泉式中～後半段階の土師器環・高坏・甕が出土している。東に位置する13号墳は、内寸規模が20m・墳丘高2m余りの円墳で、想定長300cm、幅110cmの割竹形木炭椽(?)が検出されている。遺物は、主体部から鉄鎌、白玉が、周溝からは双孔の石製模造品が南小泉式中～後半段階の土師器環・埴・鉢などとともに出土している。また、墳丘内から、勾玉形の石製模造品が出土している。なお、これらの古墳と東に位置する15号墳には空間があり、墳丘の消失した古墳跡が存在する可能性がある。この空間については、昭和51年に調査は行われていないが、同地区の一部は県道の拡幅予定地に含まれていることから、近い将来に古墳跡の有無を確認できるものと考えている。

正直23号墳は、昭和24年に福島県学生考古学会の梅宮茂氏らによって主体部のみの調査が行われている。主体部は木炭椽と粘土椽(?)で、木炭椽から櫛・琥珀玉・刀子形の石製模造品が出土している。23号墳はその後、昭和60年に財団法人東洋文化財研究所によって墳丘の測量調査が行われ、現存する規模が東西26m・南北23m・高さ2.5mで、墳形は円墳である可能性が指摘されている。23号墳は、他の多くの古墳とは開析谷によって画された狭い丘陵上に位置し、同じ丘陵に隣接する22号墳や北側の方墳と思われる28・29号墳とブロックを形成している。また、23号墳の南には正直館跡が丘陵中央部の広いスペースを占有しており、この館によって数～10基前後の古墳が消滅したものと考えている。

正直27号墳は、開畑時に未塗りの箱式石棺が発見されたため、昭和45年に郡山市教育委員会が調査を行った。27号墳は、正直古墳群のほぼ中央にあり、24～26号墳とともに1グループを形成している。同

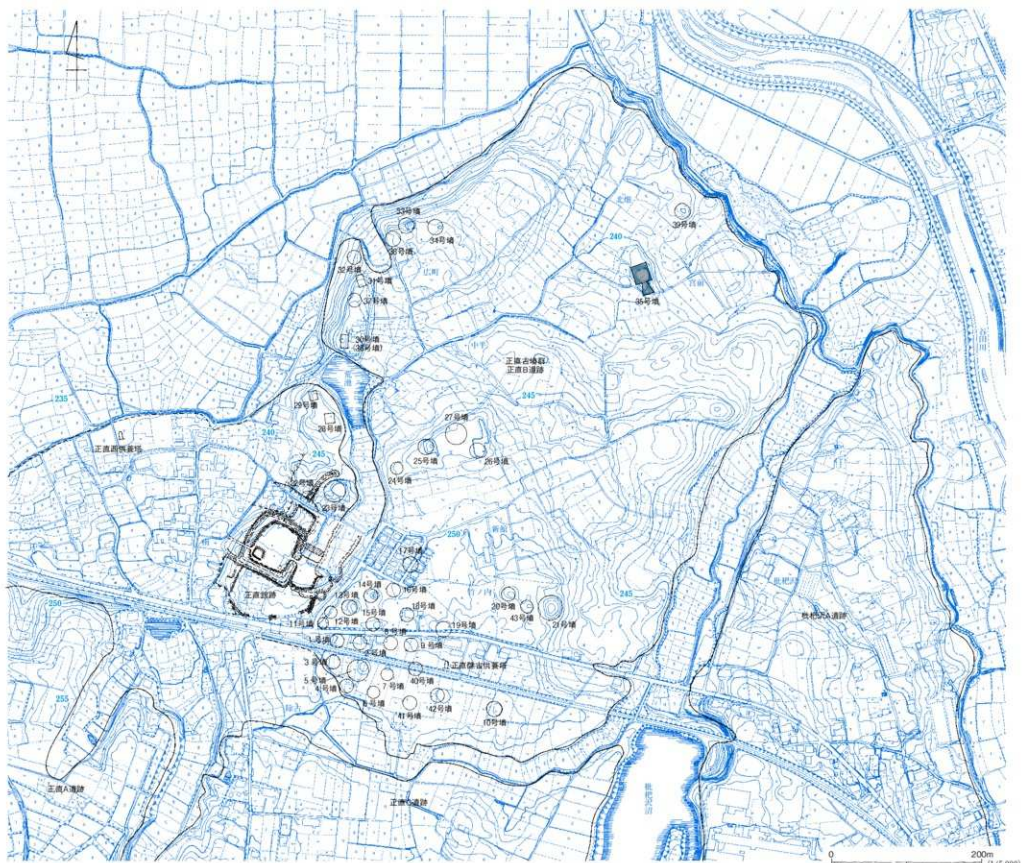
墳は、墳丘規模が径25～26mの円墳と考えられ、主体部は南北に2棺検出された。ともに箱式石棺で、2室構造の北棺からは人骨3体分と鹿角装の剣・同刀子・直刀・鉄斧・ガラス玉・白玉・石製模造品（剣・双孔円板・単孔円板）が、南棺からは鉄鎌・鉄斧・石製模造品（斧・剣・刀子・双孔円板・単孔円板）などの副葬品が豊富に出土している。27号墳は、これらの副葬品から5世紀の中葉期に築造されたものと思われるが、周溝の調査を行っていないため土器が出土しておらず、時期の確定が難しい。

正直30号墳（第4図）は、正直古墳群の北西地区にあり、31・32・37号墳が同一丘陵上にある。また、開析谷を挟んだ北側の台地先端には33・34・38号墳が別グループを形成している。この古墳は、個人の宅地造成に伴い郡山市教育委員会が昭和57年度に調査を行い、南北22.5m、高さ1.5mの長方墳であることを確認している。墳頂部から2棺並列の直葬墓が検出され、中央に位置する2号主体部が先行するものと思われる。この主体部からは刀子・瑪瑙製勾玉・管玉・ガラス玉が、北にある1号主体部からは管玉・琥珀玉・白玉と石製模造品（剣・刀子・双孔円板・単孔円板）が出土し、各主体部の副葬品の違いが指摘されている。

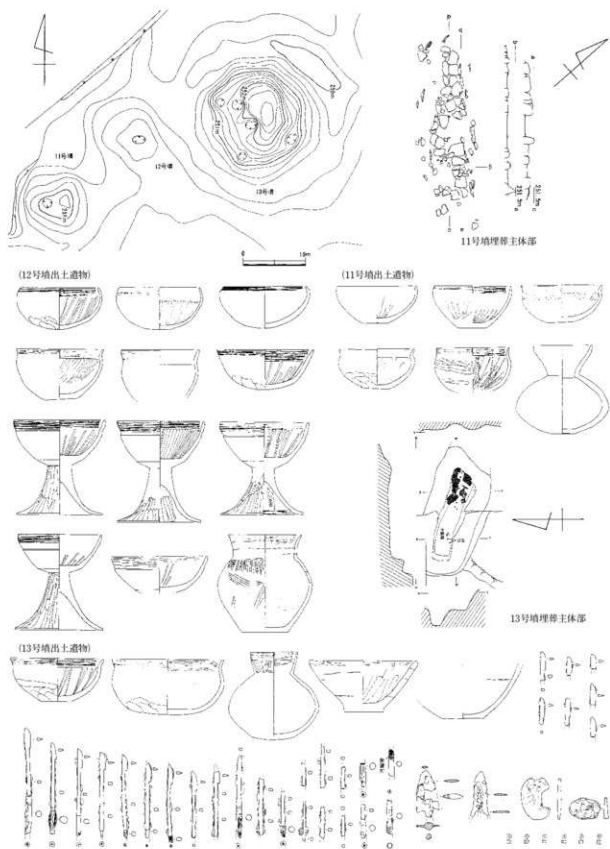
正直36号墳（第5図上段）は、30号墳の周溝内で確認された排水施設のある礎礎で、30号墳の周溝内主体部である可能性が高い。礎礎の規模は長さ440cm以上・幅240～250cmで、副葬品として石製模造品（剣・双孔円板・単孔円板）が出土している。時期は、埋土中から出土した土師器環から5世紀後半と考えられ、先行すると思われる30号墳もほぼ同時期であると考えている。30号墳の調査では、36号墳以外に墳丘下から弥生後期の竪穴住居跡3棟と墳丘裾から奈良時代の合口甕棺1基（第5図下段）も確認されている。

正直35号墳（第6図）は、当初中期の前方後円墳と考えられていたが、穴沢味光氏の前方後方墳ではないかとの指摘を受けた柳沼賢治氏などによる測量調査により前方後方墳であることが確認されている。調査は平成2年に実施され、これによって後方がやや縦長（22×25m）で、全長は37mであることが判明した。また、測量報告の中で明言は避けながらも35号墳が4世紀代の古墳であることを指摘している。また、既調査の古墳が5世紀後半に偏っていることから、今後は35号墳に後続する中期前半の古墳が存在するか否かを確認し、正直古墳群形成の契機をさぐる必要があるとの提言がなされた。この後、35号墳の築造時期については、谷田川を挟んだ対岸から発見された前方後方墳の大安場古墳との比較で、4世紀でもやや古い時期との考えも提示されている。

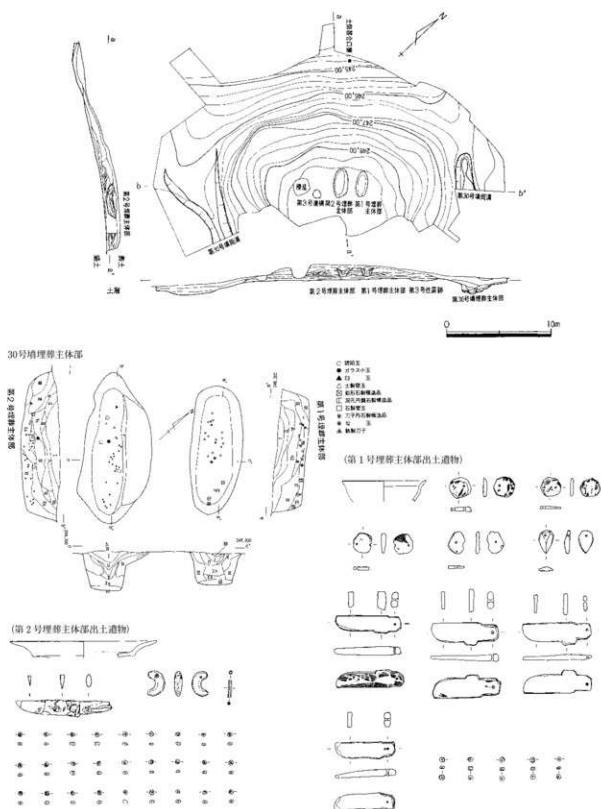
正直15号墳（第7・8図）は、11～13号墳と同じく古墳が集中する南ブロックに位置する。県道拡幅工事に伴い、複合する正直B遺跡とともに平成7年度に発掘調査が行われた。周溝内寸径が約20mの円墳で、墳端と周溝の間にテラスが存在した可能もあったことから、テラスがある場合とない場合の2種類の図面が作成されている。テラスが存在した場合は、墳丘規模は約14mとなる。主体部は確認されていないが、墳頂部や周溝上層から凝灰岩片が出土したことから、箱式石棺であったと考えられている。周溝内・墳丘下の旧表土直上面・墳丘盛土から、土師器環・高環・埴・甕・須恵器甕・石製模造品（双孔円板）と弥生土器などが出土しており、土師器環や埴の特徴から築造時期は中期後半と考えられている。なお、正直B遺跡にあたる部分の調査では、東側で土坑墓3基、北側で弥生時代後期の竪穴住居跡2棟などが確認されている。土坑墓は、土器が出土していないため時期は明らかでないが、隣接古墳との位置関係や堆積土中の火山灰（F P）の有無などから、中期後半から後期前半と考えられている。



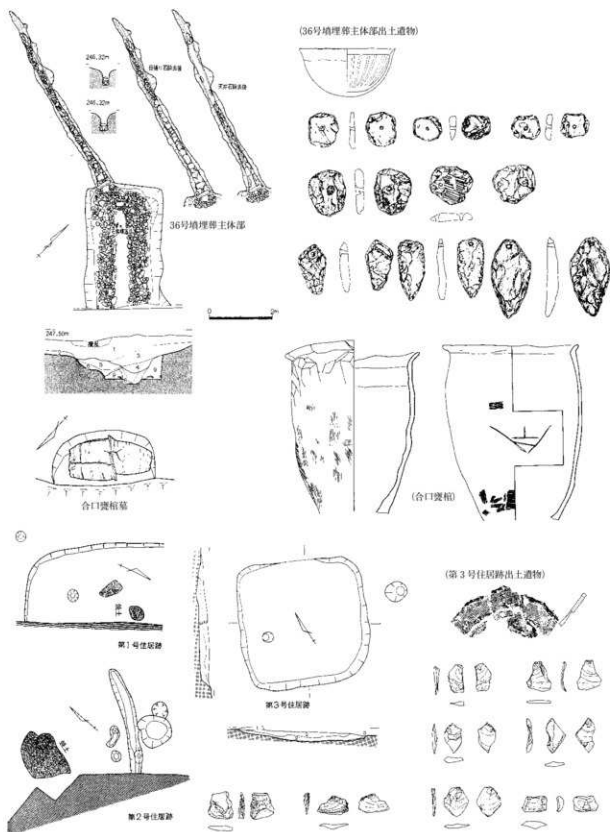
第2図 正直古墳群・正直B遺跡と周辺の地形 (地形図は国宮総合農地開発母地区の計画平面図を縮小・複製)



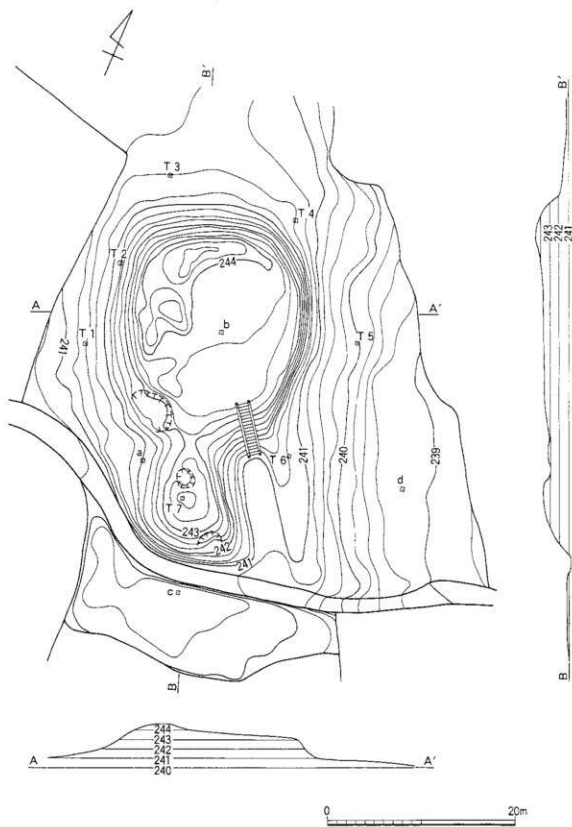
第3図 正直11・12・13号墳



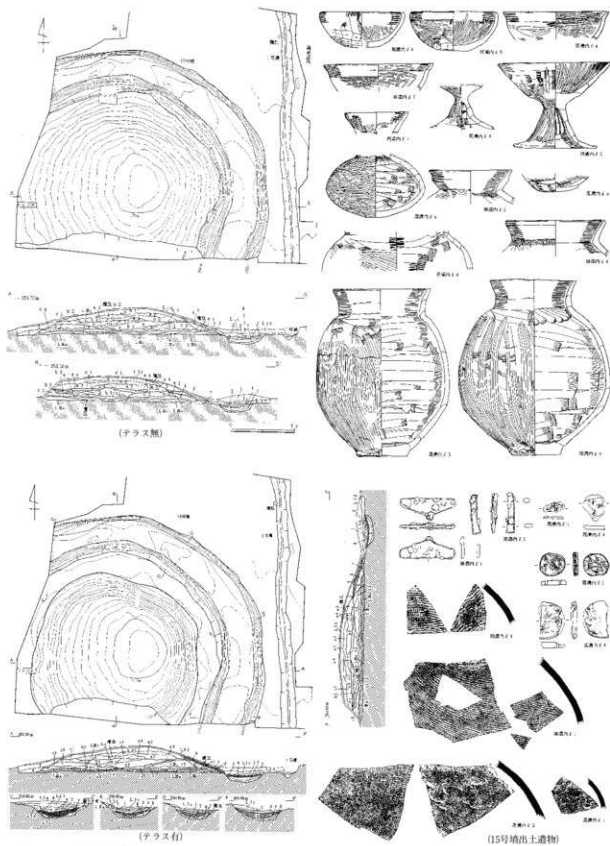
第4図 正直30・36号墳(1)



第5圖 正直30・36号墳(2)

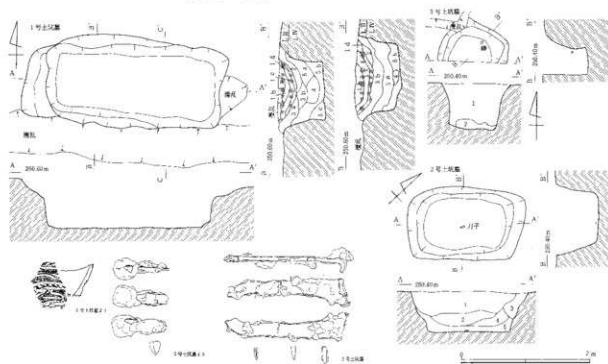
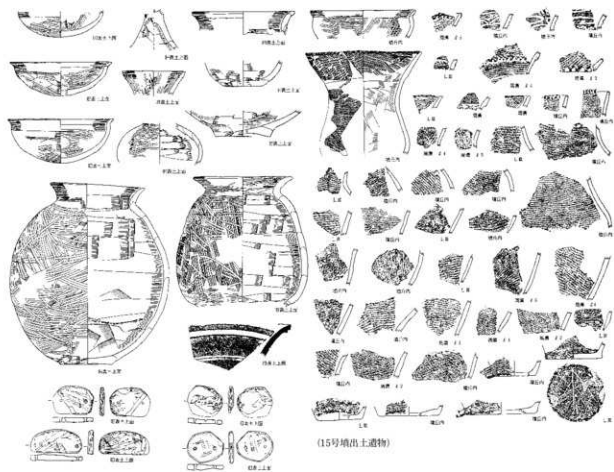


第6図 正直35号墳



第7図 正直15号墳(1)

第1章 位置と環境



第8图 正直15号墳(2)

< 註 >

- 1 鈴木雄三 1987 『東丸山遺跡』郡山カルチャーパーク関連報告第1集 福島県郡山市都市計画部・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市理蔵文化財発掘調査事業団
- 2 高松俊雄・柳沼賢治ほか 1982 『大善寺地区遺跡』〔郡山東部Ⅱ〕福島県郡山市教育委員会
- 3 石山 滋 1999 『山中日照田遺跡—第2次調査報告』エヌ・ティ・ティ東北移動通信網株式会社・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市理蔵文化財発掘調査事業団
- 4 柳田和久・高松俊雄 1986 『北山田遺跡 発掘調査概報』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市理蔵文化財発掘調査事業団
- 5 柳田和久・高松俊雄 1986 『北山田2号墳 発掘調査概報』福島県郡山市教育委員会
- 6 柳田和久・高松俊雄 1988 『北山田遺跡・北山田3号墳』〔郡山東部8〕福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 7 高松俊雄 1989 『北山田遺跡』〔郡山東部9〕福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 8 柳沼賢治 1985 『宮田A遺跡』〔郡山東部V〕福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 9 木元元治ほか 1981 『徳定遺跡』〔東北新幹線関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ〕福島県教育委員会・日本国有鉄道
- 10 柳沼賢治 2014 『徳定A・B遺跡—第1・2次発掘調査報告—』福島県郡山市都市整備部・福島県郡山市教育委員会・公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
- 11 柳沼賢治 2015 『徳定A・B遺跡—第3・4次発掘調査報告—』福島県郡山市都市整備部・福島県郡山市教育委員会・公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
- 12 柳沼賢治 2016 『徳定A・B遺跡—第5・6次発掘調査報告—』福島県郡山市都市整備部・福島県郡山市教育委員会・公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
- 13 高松俊雄 1996 『上之内遺跡』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市理蔵文化財発掘調査事業団
- 14 高松俊雄ほか 1999 『清水内遺跡—6・8・9区調査報告—第1冊』郡山市御前南土地区画整理組合・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市理蔵文化財発掘調査事業団
- 15 柳沼賢治 1987 『大根畑遺跡—発掘調査報告書—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市理蔵文化財発掘調査事業団
- 16 穴澤武泰 1991 『大根畑遺跡—第4次発掘調査報告書—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市理蔵文化財発掘調査事業団
- 17 柳沼賢治 1987 『永作遺跡』〔郡山東部7〕福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 18 柳沼賢治 1990 『南山田遺跡』〔郡山東部10〕福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 19 柳沼賢治 1991 『南山田遺跡 第一冊』農林水産省東北農政局・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市理蔵文化財発掘調査事業団
- 20 郡山市 1975 『資料(上)』〔郡山市史〕第8巻
- 21 山内幹夫ほか 1994 『正直A遺跡』〔母畑地区遺跡発掘調査報告34〕福島県教育委員会
- 22 田中正能 1974 『太田遺跡』郡山市教育委員会
- 23 鈴木雄三 1988 『丸山遺跡』郡山カルチャーパーク関連報告第2集 福島県郡山市都市計画部・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市理蔵文化財発掘調査事業団
- 24 高松俊雄ほか 1984 『三ツ垣古墳群・史跡宇津峯』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市理蔵文化財発掘調査事業団
- 25 柳沼賢治 1997 『大安場古墳群—第1次発掘調査報告—』福島県郡山市教育委員会
- 26 柳沼賢治 1999 『大安場古墳群—第3次発掘調査報告—』福島県郡山市教育委員会
- 27 註2文献の第9章総括終わりに、註20文献の第1編考古個別解説22、註25文献の第1章2節歴史的環境などを参照した。
- 28 金崎住生・高松俊雄ほか 1979 『阿弥陀壇 古墳群発掘調査概報』福島県郡山市教育委員会
- 29~32 註4~7文献と同じ
- 33・34 註18・19文献と同じ

第1章 位置と環境

- 35 註25文献の第1章第1節歴史的環境に記載された内容を参照した。
- 36 高松俊雄 1986 「妻見塚遺跡」〔郡山東部6〕 福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 37 柳沼賢治 1986 「下永田B遺跡—発掘調査報告書—」 福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 38 佐藤雄寿 1960 「田村郡御代田古墳調査」〔福島県埋蔵文化財調査報告書〕 福島県教育委員会
- 39 註25文献の第1章第1節歴史的環境に記載された内容を参照した。
- 40 伊東信雄 1971 「郡山市福楽沢遺跡発掘調査報告書」 福島県郡山市教育委員会
- 41 田中正能ほか 1962 「福島県郡山支塚古墳」 福島県郡山市教育委員会
- 42 田中正能ほか 1971 「福島県郡山市河の上遺跡発掘調査概要—阿武隈川上流改修工事文化財調査—」 東北地方建設局福島工事事務所 福島県郡山市教育委員会
- 43 押山雄三 2011 「守山城跡で発見された古墳」 大安場史跡公園平成23年度第1回歴史講座発表資料
- 44 垣内和孝 1994 「松井綾夫著『安積郡大槻村に於ける遺跡遺物の研究』の紹介と若干の検討—特に「大槻村古墳墳丘分布図」を中心に—」〔研究紀要〕第1号 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
この文献の中で執筆者は、「大槻村古墳墳丘分布図」にある古墳の位置を現在の地図に落とし込んだ「大槻町古墳分布推定図」を作成しているが、その中で、古墳の分布に数か所のまとまりがあると捉え、北ノ山壇（字新池下・御花畑）に集中する73基余りの古墳を大槻古墳群と呼称することを提唱している。
- 45 郡山市教育委員会 2001 「郡山市の文化財 保存版」
- 46 柳沼賢治 1992 「蘆倉古墳群—分布調査—試掘調査報告—」 福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 47 垣内和孝ほか 1998 「蘆倉古墳群—測量調査・補足調査報告—」 福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 48 高松俊雄ほか 1998 「蘆倉古墳群—55・56・57号墳調査報告—」 福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 49 鴨原靖彦・垣内和孝ほか 1999 「蘆倉古墳群—第5調査報告—」 福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 50 垣内和孝・菅野直美 2000 「蘆倉古墳群—第6次調査報告—」 福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 51 垣内和孝・菅野直美 2001 「蘆倉古墳群—第7次調査報告—」 福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 52 柳沼賢治 2009 「蘆倉古墳群—第8・9次発掘調査報告—」 福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市文化・学び振興公社
- 53 註25文献の第1章第2節歴史的環境や註47文献の第1章位置と環境に記載された内容を参照した。
- 54 高松俊雄・佐久間正明 2002 「野夷穴横穴墓群—12・13号横穴調査報告—」 郡山市農林部・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 55 福島県 1964 「資料編— 考古資料」〔福島県史〕第6巻
- 56 註20と同じ
- 57 佐藤雄夫・高松俊雄 1977 「正直11・12・13号墳—発掘調査概要—」 福島県郡山市教育委員会
- 58 吉田幸一・高松俊雄ほか 1982 「正直古墳群第30・36号墳—発掘調査概要—」 福島県郡山市教育委員会
- 59 柳沼賢治・押山雄三・仲田茂司 1991 「郡山市正直35号墳の測量調査」〔福島考古〕第32号 福島県考古学会
- 60 押山雄三 1996 「正直B遺跡—発掘調査報告書—」 福島県県中建設事務所・郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至るまで

正直B遺跡内に所在する正直古墳群の保護・保存を目的に、文化庁の国庫補助事業として、平成29年度から古墳群の内容把握と実態解明のため、発掘調査を進めている。

平成29年度は、墳丘から周溝にかけて一部削平を受けた正直21号墳と、同古墳に隣接する20号墳、43号墳を対象として第1次発掘調査を実施した。この調査では、3基が所在する範囲約2,800㎡の地形測量及び個々の古墳測量を行うとともに、周辺古墳の中では中核的な位置付けとなる21号墳については、削平部分の精査を行い、古墳の形態・規模、周溝の確認を行った。その結果、20号墳は方墳らしいこと、43号墳は円墳であるが規模の点で検討を要すること、21号墳は周溝が不明瞭な箇所があるものの、見かけの墳丘規模が34m前後の円墳で、墳頂の北寄りに埋葬施設に関わる陥没坑らしい落ち込みがあることなどが確認された。ただし、同墳は周溝を含めた詳細な規模や埋葬施設本体が未確認であること、古墳の年代確定に至る遺物が検出されなかったことから、平成30年度に調査を継続することとした。

平成30年度は、正直21号墳の周溝を含めた詳細な規模の確定、埋葬施設の確認、築造年代の確定などを目的に第2次発掘調査を実施した。その結果、同墳は周溝を含めた径が約47mの円墳で、墳頂には2棺並列となる埋葬施設が遺存することが確認された。また、周溝などから出土した壺形埴輪片から、古墳時代前期末から中期初頭の築造で、古墳群内の年代的な空白期を埋める重要な古墳であることが判明した。なお、屋外調査終了後には、正直B遺跡「正直古墳群」調査保存に係る懇談会（以下、「懇談会」という。）の助言を得て、平成2年に有志によって地形測量図が作成されていた正直35号墳について、改めて10cm間隔の等高線による地形測量図を委託作成し、次年度以降の発掘調査に備えた。

令和元年度の第3次発掘調査は、正直35号墳を対象とした。当初は、この調査で形態、規模、築造時期の確定及び埋葬施設の確認を行う計画を立てたが、懇談会での協議の結果、まずは同墳各所の墳端を確定することが主な目的になった。

平成31年4月17日付けで地権者から立木伐採および発掘調査の承諾を得て、5月28日から7月26日まで古墳内の立木伐採を行った。その後、7月29日付けで郡山市と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社との間で、第3次発掘調査及び報告書作成業務の委託契約を締結し、9月12日から発掘調査に着手した。なお、5月16日および8月22日には正直行政区住民の方々へ回覧を通して発掘調査の周知を図り、8月22日に福島県教育委員会に文化財保護法第99条に基づく届出を行った。

懇談会については、8月8日に第1回、11月22日に第2回を開催し、第1回では主に正直35号墳の調査箇所、第2回では今年度の調査成果の検証及び来年度の調査について指導助言を受けた。また、この間、10月21日には菊地委員と柳沼委員より、11月8日には柳沼委員より墳丘面や墳端の捉え方について現地指導を受けた。

第2節 第1次発掘調査の目的と成果

第1次発掘調査は、開発行為により墳丘や周溝の一部が削平され、保護・保存が急務となっていた正直21号墳と同古墳の西側に隣接し、一つのグループを形成するとみられる20・43号墳を対象とした。

この調査では、3基の位置関係を把握し、それぞれの墳形や見かけの大きさを確定することが主な目的となった。このため、3基が所在する範囲約2,800㎡の地形測量と古墳各々の10cm間隔の等高線による現況測量を行った。また、3基の中で中核的な位置付けとなる21号墳については、より詳細な情報を得るため、削平部分の精査を行い、範囲や深さを把握するとともに、この部分を利用して埋葬施設・周溝の確認、墳丘盛土の観察などを実施した。その結果、次のような成果があった。

正直20号墳 古墳群の中で、多数の古墳が密集する南ブロックと21号墳の間に築造された古墳で、21号墳から40m前後西に離れている。墳丘南西端に北東-南西方向に延びる時期不明の土手状の高まりが取り付いているが、墳丘北側から東側を経て南側に至る等高線は直線的にまわり込むことから、墳形は方墳の可能性が高い。現況の墳丘規模は、東西約10.9m・南北約7.9mで、東西方向にやや長い形状である。墳頂は東に寄り、東西約3.3m×南北約2.1mの範囲で平坦面が確認できるが、墳高が最大で1.1m前後であることから、上面は削られた可能性がある。墳裾の等高線からは、周溝の有無は確認できない。

正直43号墳 21号墳から西に約30m、20号墳からは東に約10m離れた台地平坦面に位置する。墳丘の等高線は円弧状にまわることから、墳形は円墳とみられる。墳丘規模は長径約4.6m・短径約4.5mで、墳高は0.6m前後である。墳裾の外周はほぼ平坦で、周溝の有無は確認できない。古墳群の中では極めて小さいことから、詳細については検討する余地がある。

正直21号墳 古墳群の南東部、東に延びる台地先端に築造された古墳で、3基の中では最も東に位置する。墳丘南東から南にかけて、1/4程度が大小の削平を受けている。墳丘南側斜面は、盛土が露出した程度であるが、墳丘南東側の中腹から下と南側の墳裾は失われている。墳頂周辺は、東側の中腹から南側の中腹取りまでの範囲が10～50cm程度削平され、平坦面と想定される部分は北側と西側のみ僅かに遺存する。墳丘の等高線は墳裾を南北に旧道が走る東側がやや直線的であるが、他はほぼ等間隔に円弧状にまわることから、墳形は段築のない円墳とみられる。現況の墳丘規模は、北東-南西の墳頂想定線で34m前後、墳高は西側からみると2.7m前後、東側からは3.4m前後である。削平により露出した墳丘東側断面の盛土は、旧表土の上に黄褐色系の土と黒褐色系の土を交互に積み重ね、最も外側には黄褐色系の土を積んでいる。周溝は、墳丘南側の削平部で約4.5～6.5mの幅で残存しており、めぐるとは確実と思われるが、西側の墳裾でコの字状に折れる溝状の落ち込みに挟まれた南北約15mの範囲や東側墳裾を走る旧道とその東側の斜面では等高線に窪地状の地形が読み取れないことから、途切れる可能性もある。墳頂の削平部分で木棺陥没坑とみられる落ち込みを検出したが、掘方は検出できなかった。この落ち込みは墳頂の北寄りに位置することから、別の埋葬施設が南側に存在する可能性もある。削平部分で土師器片などが331点出土したが、これらにより築造時期を特定するまでには至らなかった。

その他 21号墳の南側削平部分で1号溝跡、東側の削平部分で2・3号溝跡、その北側断面で4号溝跡を検出した。旧道下の4号溝跡は21号墳を切っているが、他の3条と21号墳との関係は不明である。

第3節 第2次発掘調査の目的と成果

第2次発掘調査は、引き続き正直21号墳を対象とした。同古墳については、第1次発掘調査終了時点で、①周溝を含めた詳細な規模の確定、②等高線の観察で不明瞭な墳丘西側と東側の周溝の確認、③墳頂の北寄りに位置する木棺陥没坑を伴う埋葬施設の確認、④③以外の埋葬施設の有無の確認、⑤築造時期の確定、などが課題として残っており、これらを解決することが主な目的となった。

発掘調査は、①・②のため現況図で最も墳形の整っている北東側と南西側に対峙する形で各1本、墳丘西側と東側に対峙する形で各1本、その他第1次発掘調査で掘り下げた第1トレンチに対峙する形で北側に1本、合計5本のトレンチを設定して行った。また、③・④については、3回にわたる柳沼委員の現地指導を得て、断続的に検出作業を行った。その結果、同古墳については第1次発掘調査の成果を含めて、最終的に次のような成果を得た。

墳形 これまで、円墳とする認識（梅宮 1964）と方墳とする認識（柳沼・押山・仲田 1991）が示されていたが、各トレンチで現況測量図とおおむね同様な等高線の流れが確認され、段築のない円墳であることが確実となった。墳丘東側の等高線が全体的に西に寄った状態で直線的にまわる点については、5号トレンチの所見から墳丘面が一定の範囲で削平されたことに起因するものと判断された。

墳丘 第2～4・6トレンチで帯状にめぐる旧表土層が墳丘面で検出されたことから、下半部を旧表土層と地山層の削り出し、上半部を盛土で築成していることが確定した。墳丘面の傾斜は第5トレンチを除いてほぼ15°前後で、盛土は墳丘東側削平部の観察では旧表土層の上に黄褐色系の土と黒褐色系の土を交互に積み上げている。各トレンチの墳丘表面では、この互層状の積み上げが確認できないことから、外表部分は混じりけの少ない土で覆った可能性が高い。

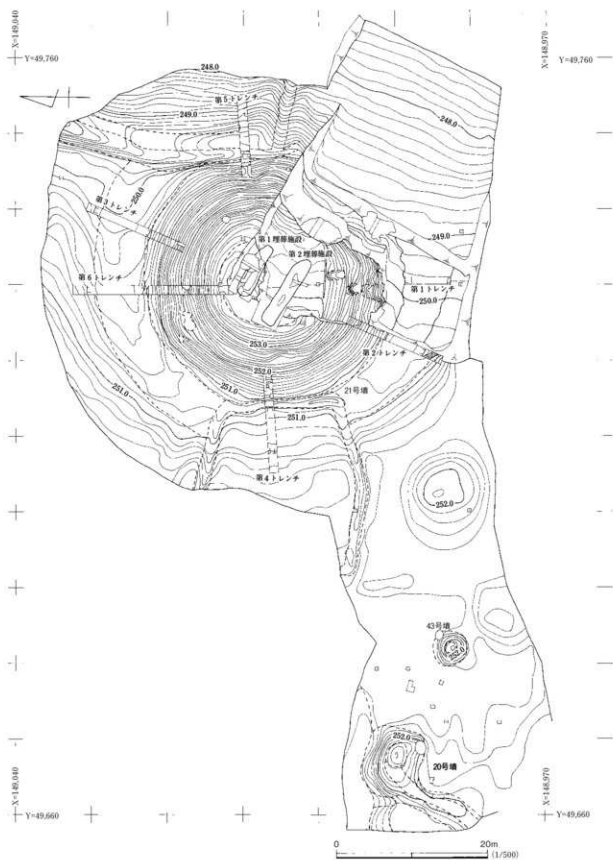
周溝 すべてのトレンチで検出されたことから、削平によってその有無自体が不明な墳丘南東側を除いて、ほぼ全周する。ただし、墳丘東側の第5トレンチでは外側の立ち上がりが判然としないことから、墳丘東側の台地から下る斜面部では、外側の立ち上がりが流失している可能性がある。

規模 第2トレンチと第3トレンチを基準に計測すると、墳丘規模（墳端間）は径約37m、周溝外端まで含めると径約47mである。また、墳丘高（墳端からの高さ）は、第2トレンチで約3.6m、第3トレンチで約4.2mを測り、この内、盛土の厚さは両トレンチともに2.1m前後である。

埋葬施設 削平を受けた墳頂部に2基遺存する。北側に位置する第1埋葬施設は、掘方の規模が長さ約7.3m、幅約2.0mで、主軸方向はN54°Eである。重複する1号掘乱坑の南側壁面をみると、粘土などの痕跡は認められないことから、木棺直葬の可能性が高い。第2埋葬施設は、第1埋葬施設とほぼ並行し、同埋葬施設の南側に位置する。掘方の規模は長さ約10m、幅約2mで、主軸方向はN56°Eある。この埋葬施設も陥没坑を伴うことから、木棺が納められているものと推測される。

築造時期 第5・6トレンチなどの粘土紐を輪状にして製作された開口底部資料、第2トレンチの二重口縁壺の口辺から頸部にかけての資料、第5トレンチの頸部上半から口辺にかけての資料、第2・6トレンチの突帯部資料など、古墳に伴う壺形埴輪と推定される破片資料が出土している。これらの類例との比較検討から、古墳時代前期末葉から中期初頭の幅のなかで築造されたものと想定される。

第2章 調査の経緯



第9図 第1・2次発掘調査終了後の正直20・21・43号墳

第4節 測量調査の方法と経過

第1章第2節で記したとおり、正直35号墳は平成2年に測量調査が実施されている。その報告では、等高線の間隔が25cmの測量図が示され（第6図参照）、全長約37m、後方部の長さ約25m、前方部の長さ約12m、後方部の幅約22m、前方部の幅約12mを測る前方後方墳であると結論づけている。

この調査から既に25年以上が経過し、当時植林されていた杉の成長や表層の浸食により、古墳の形状もかなり変化していると予想されたことから、郡山市では懇談会の助言を得ながら、平成30年度に株式会社草野測器社郡山支店に業務委託し、新たな測量図を作成した。また、令和元年度には不自然な等高線の一部改修も行った。この測量図の作成方法は、以下のとおりである。

①GPS測量により、古墳周囲に基準点4点を作成。②3Dレーザ計測を行う。③3Dレーザ計測で取得した点群データを編集。④データ処理した点群を基にメッシュデータを作成。メッシュデータにより等高線解析。⑤10cm間隔で等高線の編集を行い、縮尺400分の1と100分の1測量図を作成。

基準点座標一覧

基準点	X座標	Y座標	Z座標
T 1	149,448.313	49,906.876	238.378
T 2	149,403.513	49,847.945	240.814
T 3	149,432.052	49,820.822	240.850
T 4	149,458.221	49,813.181	240.701

令和元年度には、前年度に作成した測量図を以下の方法により改修を行った。

①GPS測量により、不明となった基準点2点を復元（T3-1・T4-1）。新たに古墳内に2点作成（T5-1・T5-2）。②測量図の等高線で必要な高さを取得するためトランシット測量を行う。③既存の測量図を基に、等高線を追加し、不自然な線等の修正作業を行う。

基準点座標一覧

基準点	X座標	Y座標	Z座標
T 3-1	149,429.517	49,818.392	240.903
T 4-1	149,457.944	49,813.443	240.771
T 5-1 (古墳内)	149,432.310	49,853.422	243.546
T 6-1 (古墳内)	149,450.686	49,849.009	243.924

なお、この測量調査では、古墳とその周囲の表面観察による傾斜変換線の記入は行っていない。

第5節 第3次発掘調査の経過

今年度の発掘調査は、前方後方墳とされる正直35号墳を対象とした。8月8日の第1回懇談会で、郡山市から今年度の調査計画案が示され、この案を土台として調査の目的や進め方について協議が行われた。その結果、同古墳は測量図に周溝の痕跡が認められないことやかつて後方部墳頂にあった神社の参道が前方部東側墳裾からくびれ部にかけて取り付いていることから、今年度は周溝の確認を含めて前方

第2章 調査の経緯

部と後方部の東西両側の墳端と後方部北側の墳端を確定することを優先的に進めることとなった。なお、この懇談会では、トレンチの具体的な設定位置についても検討され、委員指導の下、墳丘上で想定主軸線とこれに直交する後方部想定中心線を決め、この線を基準に各所にトレンチを設定することとなった。

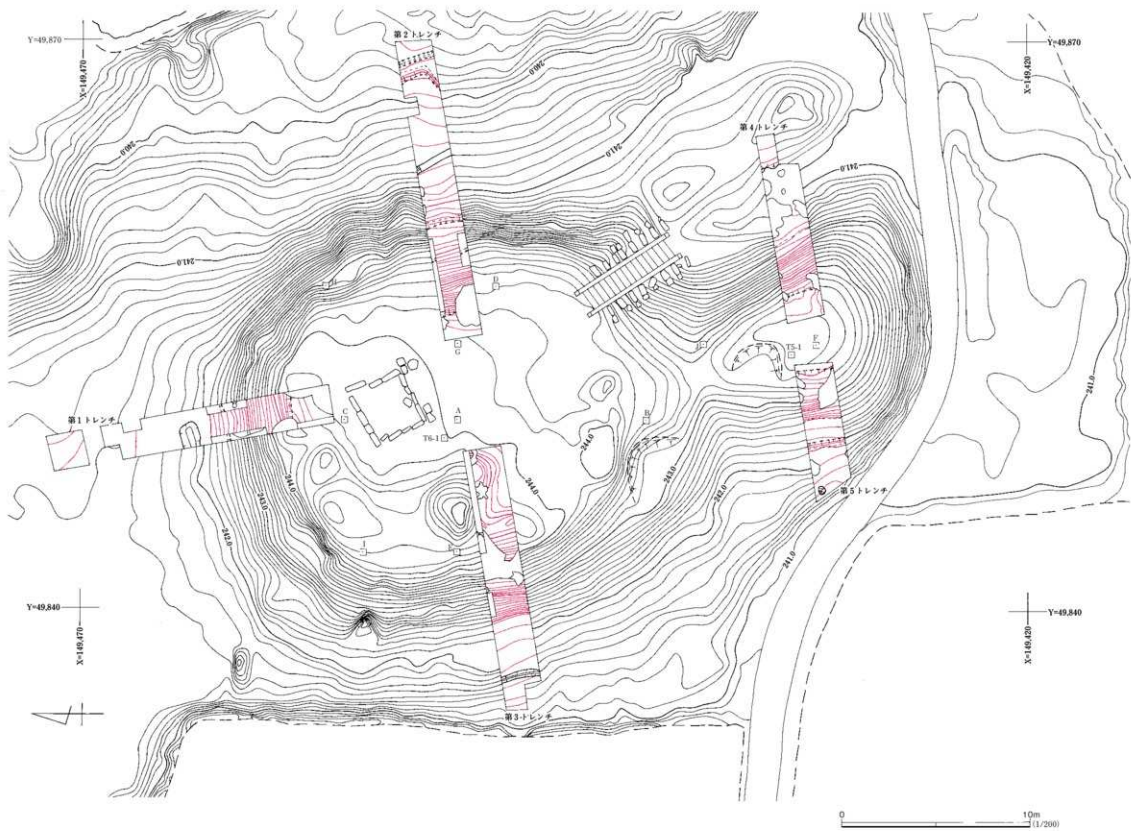
発掘調査は、9月12日より開始した。墳丘とその周辺には、伐採木搬出時に残された枝木の他、倒木、枯枝・枯葉などが蓄積しており、これらの片付け作業からはじめた。その後、後方部北側に第1トレンチを設定して掘り下げを開始し、以後、後方部東側の第2トレンチ、西側の第3トレンチ、前方部東側の第4トレンチ、西側の第5トレンチの順に調査を行った。第2トレンチでは、西半斜面部に予想を超える堆積土があり、複数回の深掘りで墳丘面を確認した。また、第1・2トレンチでは、墳端の検出が難航し、サブトレンチにより墳丘盛土の下まで地山層を追うことで、ようやく確認することができた。

各トレンチの掘り下げは、芝ジョレンと移植ゴテを併用した。出土遺物は、はじめのうちは極力出土位置を記録して取り上げたが、その多くが弥生土器片であることがわかり、時間的な制約もあったことから、後半は記録なしで取り上げたものが多かった。測量にあたっては、GPS測量によって墳丘上に作成された基準点T5-1、T6-1を利用して、トレンチ毎に見渡せる位置にA~Jを打設し、これらも基準点とした。遺構の平面図と断面図はともに縮尺20分の1で採録し、平面図には10cm間隔で等高線を記入した。以下に調査日誌の概要を記す。

- 9月12日(木) 墳丘とその周辺に蓄積した枝木や倒木、枯枝・枯葉の片付け作業を開始する。
- 9月20日(金) 第1トレンチの調査を開始する。密集する杉の細かい根を芝ジョレンで除去する。
- 9月25日(水) 北半の平坦面で黄褐色の地山層を検出する。この層は北端まで一様に続き、周溝がめぐっていないことが判明する。南半の斜面部では墳丘盛土の検出作業を継続する。
- 9月30日(月) 南半の斜面部で、黄褐色土と黒褐色土の交互堆積層が露出し、墳丘盛土と認識する。
- 10月3日(木) 第2トレンチの調査を東半から開始する。第1トレンチでは、盛土直下の斜面から平坦面にかけて旧表土層とみられる黒褐色土を検出する。
- 10月7日(月) 第1トレンチ北半平坦面の南寄り、トレンチ外へ続く1号遺構を検出する。
- 10月9日(水) 第1トレンチの1号遺構南側の黒褐色土と盛土下の旧表土層の区別がつかず、墳端検出が難航する。西壁面にサブトレンチを入れて、地山層の変化を追うこととする。
- 10月10日(木) 第1トレンチ西壁面のサブトレンチで、地山層に段差があることを確認する。
- 10月15日(火) 第1トレンチ墳頂平坦面の西壁面にサブトレンチを入れて、墳丘盛土を観察する。
- 10月18日(金) 第2トレンチ東半で黄褐色の地山層を検出する。このトレンチでも周溝らしい落ち込みは確認できない。西半斜面部は掘り下げを継続する。
- 10月21日(月) 第3トレンチの調査開始。菊地委員、柳沼委員現地指導。①第1トレンチの墳端の確定は難しいので、第2・3トレンチと比較しながら検討したほうが良い。②第1トレンチ墳頂平坦面のサブトレンチをもう少し掘り下げて、盛土を確実に捉えること。③第2トレンチの西半斜面部は、墳頂にあった旧神社の敷地造成時に押した土が相当乗っけているので、かなり掘らないと墳丘盛土は検出できない。などの指導・助言があった。
- 10月23日(水) 第2トレンチ西半斜面部の墳丘盛土を検出するため、北・南壁面の深掘りを繰り返す。
- 11月1日(金) 第2トレンチで、墳頂西端寄りの土塁のような高まりが古墳築造時の盛土と認識する。



第10图 正直35号地测量图



第11図 正直35号墳トレンチの配置と遺構

第5節 第3次発掘調査の経過

- 11月6日(木) 第2トレンチ西半斜面部が墳丘盛土面に到達する。下部では、北壁面に入れたサブトレンチで地山層に段差があることが判明する。この部分が墳頂の可能性がでてきた。
- 11月8日(金) 柳沼委員現地指導。①第2トレンチの墳頂が明確でない。北壁面のサブトレンチで検出した地山層の段差が南壁面まで続くのか確認すること。②地山層の段差が墳頂とすれば、旧表土層も削っているので、セクション線を整理すること。などの指導・助言があった。
- 11月11日(月) 第4トレンチの調査を開始する。第3トレンチでは、斜面部に盛土、旧表土層、地山層を連続的に検出し、地山層を削って墳頂をつくっていることが判明する。
- 11月13日(木) 第3トレンチの墳頂平坦面と斜面下部にサブトレンチを入れて、盛土確認を徹底する。
- 11月18日(月) 第5トレンチの調査を開始する。第4トレンチでは第3トレンチと同様に斜面部に盛土、旧表土層、地山層を連続的に検出する。
- 11月20日(木) 第3トレンチ調査終了。第1トレンチ1号遺構の断面図・平面図を作成する。
- 11月22日(金) 第2回懇談会開催。委員現地調査。①第1・2トレンチでは、ともに斜面下部のサブトレンチで検出された地山層の段差部分が墳頂の可能性が高い。ただし、第2トレンチには東側にもう一つ緩い傾斜変化があるので、この部分も注意すること。②第2トレンチ東半は、もう少し掘り下げてきれいな地山層を検出すること。③第4トレンチは旧神社参道の東側の高まり部分まで延長し、堆積状況を確認すること。④第5トレンチは、農道際まで延長して掘り下げる。などの指導・助言があった。
- 11月25日(月) 第1～4トレンチの全景写真撮影。懇談会の指導・助言を踏まえて、第5トレンチの西端を農道際まで延長し、補足調査を開始する。
- 11月26日(火) 第4トレンチの東端を旧神社参道東側の高まりまで延長する。第5トレンチでは、第3・4トレンチ同様な斜面部の堆積状況を確認する。第1トレンチの断面図作成。
- 11月28日(木) 第5トレンチの墳頂西側で地山層に段差があること確認する。第2トレンチの断面図作成。
- 12月3日(火) 第2トレンチ東半の地山層を再精査し、北壁面で1号遺構の堆積状況を確認する。
- 12月4日(木) 第3～5トレンチの断面図及び第4トレンチの平面図を作成する。
- 12月9日(月) 各トレンチの全景写真と部分写真撮影を行う。第1・3トレンチの平面図作成。
- 12月10日(火) ドローンによる空中写真撮影を行う。第4トレンチの埋戻しを開始する。
- 12月11日(水) 第2トレンチの平面図を作成する。後方部墳頂の旧神社基礎石列を実測する。
- 12月12日(木) 第4トレンチの埋戻しを終了し、引き続き第1・3・5トレンチの埋戻しを開始する。
- 12月13日(金) 第1・3・5トレンチの埋戻しを終了する。第2トレンチの埋戻しを開始する。
- 12月16日(月) 第2トレンチの埋戻し終了。発掘調査用機材を撤収し、第3次発掘調査を終了する。

測量基準点座標一覧

基準点	X座標	Y座標	基準点	X座標	Y座標
A	149,450.000	49,850.000	F	149,431.000	49,854.000
B	149,440.000	49,850.000	G	149,450.000	49,854.000
C	149,456.000	49,850.000	H	149,457.000	49,857.000
D	149,448.000	49,857.000	I	149,455.000	49,843.000
E	149,450.000	49,843.000	J	149,437.000	49,854.000

第3章 調査報告

第1節 後方部斜面

概要

第1回懇談会の協議結果を受けて、周溝の確認を含めて後方部北側及び東西両側の墳頂を確認し、併せてそれぞれの斜面における盛土の状態を把握するため、3本のトレンチを設定した。この内、第1トレンチは、想定主軸線上の墳頂北端付近から北斜面を経て、その北側に広がる平坦面にかけて設定した。また、第2・3トレンチは、想定主軸線に直交する後方部想定中心線上の東西両側の墳頂端付近からそれぞれの斜面を経て、同斜面より傾斜が緩くなり、墳丘外と推定される斜面にかけて設定した。

なお、後方部は、昭和43年に正直集落内へ移されるまで「菅布禰神社」として使われていたため、墳頂や斜面には現在でもその痕跡をみることができる。墳頂の中央北寄りには、方形に巡る社殿の基礎石列が現表土面に食い込むように残され、東側くびれ部からわずかに東に寄った斜面には、基礎石列に正対するように取り付けられた石敷きの参道階段が確認できる。また、基礎石列の周囲を含めて南側と東側は、神社の敷地として整地されたとみられる平坦面が広がり、北側から西側にかけては、基底部幅3.3～5.5m、平坦面との比高0.3～0.9mの土塁のような高まりが鉤の手状に屈曲しながら延びている。

第1トレンチ（第12～14図、図版4・9・10）

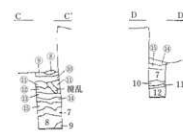
想定主軸線上の墳頂北端付近から北斜面を経て、その北側に広がる平坦面にかけて設定したトレンチである。当初は、幅約2.0m、長さ約15.2mの範囲を縄張りしたが、北端近くの立木部分は調査できなかったことから2箇所に分断され、調査面積は約27.3㎡となった。調査前は、墳頂北端付近が基礎石列の北側を東西に延びる土塁のような高まりの東端にあたり、そこから続く斜面は20～30°の傾斜で下がり、標高241.7m付近から北側はわずかに東に傾斜する平坦面が続いていた。

調査は、周溝の有無を確認するため、北半の平坦面の掘り下げを先行し、徐々に南半の斜面部や墳頂部へ移行した。北半の平坦面では、全面に堆積する1・2層と斜面部の下半から平坦面にかけて堆積する3層まで45～94cm掘り下げると、地山漸移層と思われる9層を挟んで砂礫を含む黄褐色の地山層が露出した。この地山層は、トレンチ北端までほぼ平坦に続いており、大きな落ち込みなどが確認できないことから周溝は存在しないことが明らかとなった。南側の斜面部付近では、西壁外へ延びる1号遺構を発見した。西壁面を観察すると2層から掘り込まれていることから、古墳より新しい遺構と判断し、底面まで掘り下げた。この遺構は、地山層上面で東西約195cm、南北約97cmで、深さは約26cmであった。

斜面部では、墳頂部付近の攪乱坑を含めて1層から3層まで85～94cm掘り下げると、標高242.0m辺りを境として、上方に黒褐色土と黄褐色土の互層状の堆積層が露出し、下方では1号遺構の南側辺りの地山層まで黒褐色土が続いていた。この時点で、互層状の堆積層は墳丘盛土、黒褐色土は旧表土層と認識したが、築造時に地山層や旧表土層を削って成形したか否かは判然としなかった。そこで、そのこと



第12図 第1トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図



第1トレンチ

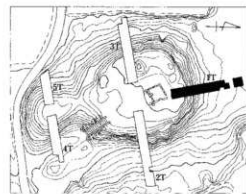
- 1 暗赤褐色土 (粘性・しまり弱、埋表土層で本層の層人が多い。)
- 2 黒褐色土 (粘性・しまり弱、埋表から詳細は暗褐色土50cmでF少量含む。)
- 3 暗褐色土 (粘性・しまり弱、Fド・黄褐色土ブロック・黄褐色土粒少量含む。炭化粉砕粉含む。)
- 4 黒褐色土 (粘性・しまり弱、F少量含む。7より色調濃い。黄褐色土粒微量含む。)
- 5 暗褐色土 (粘性・しまり弱、黄褐色土粒・ブロック微量含む。)
- 6 暗黄褐色土 (粘性・しまり弱、くすんだ黄褐色土が主体で、暗褐色土粒少量含む。)
- 7 黒褐色土 (粘性・しまり弱、炭化粉砕粉多量含む。埋表土層。)
- 8 褐色土 (粘性・しまり強、沼沢(ハ)少量含む。炭化粉砕粉多量含む。)
- 9 暗黄褐色土 (粘性・しまり弱、地山黄褐色土の澱粉層で、暗褐色土・黒褐色土粒少量含む。)
- 10 黒褐色土 (粘性・しまり弱、沼沢(ハ)少量含む。)
- 11 褐色土 (粘性・しまり強、沼沢(ハ)少量含む。やや茶色味を帯びる。)
- 12 黒褐色土 (粘性・しまり弱、黄褐色土粒・沼沢(ハ)少量含む。)
- 13 暗褐色土 (粘性・しまり弱、黄褐色土粒・ブロックや黒褐色土ブロックを含む。盛土流出上。)

第1トレンチ1号遺構

- F1 黒褐色土 (粘性・しまり弱、F少量含む。)
- F2 黒褐色土 (粘性・しまり弱、F1より色調明い、Fド微量含む。)
- F3 褐色土 (粘性・しまり強、地山の砂礫粒多量含む。)

埋瓦盛土

- ① 暗黄褐色土 (粘性弱・しまりやや強、くすんだ黄褐色土が主体で、暗褐色土ブロック少量含む。)
- ② 暗褐色土 (粘性・しまり強、黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロック少量含む。)
- ③ 黒褐色土 (粘性・しまり強、黄褐色土粒・ブロック少量含む。)
- ④ 暗褐色土 (粘性・しまり強、黄褐色土粒・ブロック、黄白色粘土ブロック少量含む。)
- ⑤ 暗褐色土 (粘性・しまり強、黄褐色土粒・ブロック少量含む。)
- ⑥ 暗黄褐色土 (粘性弱、しまりやや強、黄褐色土と黒褐色土の混上で、黄褐色土が主体。)
- ⑦ 暗褐色土 (粘性弱、しまりやや強、くすんだ黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロック少量含む。)
- ⑧ 黒褐色土 (粘性・しまり強、くすんだ黄褐色土ブロック少量含む。)
- ⑨ 暗黄褐色土 (粘性弱、しまりやや強、くすんだ黄褐色土が主体で、暗褐色土ブロック少量含む。)
- ⑩ 暗褐色土 (粘性・しまり強、黄褐色土ブロック少量、黒褐色土ブロック微量含む。)
- ⑪ 暗黄褐色土 (粘性弱、しまりやや強、黒褐色土ブロック多量含む。径5mm未満の礫少量含む。)
- ⑫ 暗黄褐色土 (粘性・しまり強、黒褐色土ブロック多量含む。径5mm未満の礫少量含む。)
- ⑬ 暗黄褐色土 (粘性弱、しまりやや強、黄褐色土と黒褐色土の混上で、黄褐色土が主体。)
- ⑭ 黒褐色土 (粘性弱、しまりやや強、黒褐色土と黄褐色土の混上で、黒褐色土が主体。)
- ⑮ 暗黄褐色土 (粘性弱、しまりやや強、黄褐色土と黒褐色土の混上で、黄褐色土が主体。)



を確認すべく斜面から平坦面に移行する部分の西壁下にサブトレンチを入れ、墳丘盛土下まで地山層の変化を追ってみた。その結果、1号遺構の南約1.5mのところ、25cm前後の段差が生じており、西断面をみるとこの段差を境にそれまで1枚の層にみえていた黒褐色土が、三角堆積する4層と旧表土層である7層に分層できることが判明した。また、これらのことは、後日東壁下に入れたサブトレンチにおいても確認できたことから、この地山層の段差は築造時の削り出しによるもので、この段差の下端の傾斜変換部が墳端にあたと判断した。この部分の高さは標高241.1m前後であることから、墳端から高さ0.9m前後、斜距離で1.4m前後の範囲の墳丘面は、地山層と旧表土層を削って成形したことによる。

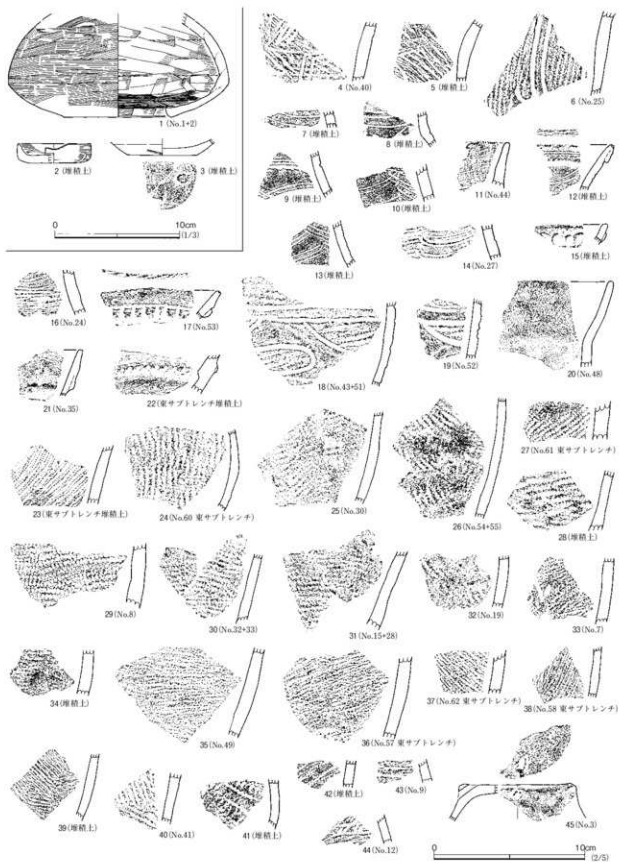
墳丘斜面は、盛土や旧表土層の流失、木根の攪乱坑などによる細かな凹凸がみられるが、段差を示すような傾斜変化は確認できなかった。墳端から旧表土層の末端までが57°～66°、それより上では30°前後の傾斜で墳頂部へ続いていた。盛土は、東西両壁下に入れたサブトレンチの断面で⑧から⑮まで8枚確認した。これらは概ね黄褐色系の混合土と黒褐色系の混合土を交互に積んだ状態で、西壁下のサブトレンチ南断面ではそれぞれ10cm前後の厚みがあった。なお、東西両壁下のサブトレンチ底面で住居跡やピットとみられる落ち込みを検出したが、これらは古墳築造以前の遺構と思われる。

土塁のような高まりの東端部にあたる墳頂北端付近では、1層を10cm前後掘り下げると中央部に暗黄褐色の盛土が露出したが、西壁の斜面側や南壁から東壁にかけては大きく攪乱を受けており、中央部と同じレベルで盛土を検出できなかった。また、中央部の盛土も木根の影響でボソボソとした状態であったことから、西壁下にサブトレンチを入れて断面で盛土の状態を視察した。その結果、①とした最上層は締まりが弱く凹凸がみられるが、②から⑥では版築状に安定した状態で積まれていることが確認できた。土塁のような高まりの形成過程は今ひとつ判然としなかったが、高まりの基底面より下まで盛土が続いていることから、神社の敷地造成時にトレンチの南端辺りまで墳丘が削られ、残丘となった部分が遺存しているものと思えた。なお、墳頂北端については、攪乱の影響により僅かな範囲での所見となったが、傾斜の変化がみられる標高243.6m前後と考えたい。

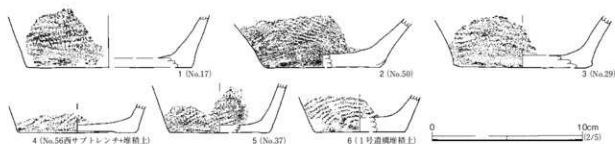
遺物は、161点出土している。その内訳は、縄文土器4点、弥生土器123点、土師器30点、須恵器1点、赤焼き土器2点、かわらけ1点で、この内、出土位置を記録したものは縄文土器3点、弥生土器49点、土師器5点、須恵器1点である。弥生土器が圧倒的に多いが、古墳に関係すると思われる土師器も2点出土している。51点図化した。

第13図1は、斜面部中腹の盛土面から出土した土師器小型壺の胴部から底部にかけての資料である。そろばん玉を潰したような器形で、最大径は底部近くにある。非常に丁寧なつくりで、底部は焼成前に粘土を切り取って穿孔している。外面はハケメ、内面は下端がハケメ、それより上はハケメと同一工具によると思われるナデが施されている。復原胴部最大径16.5cm、残存器高8.4cm、復原孔径7.8cmである。同図2は手づくねかわらけ小皿片で、口端に注ぎ口のような凹みがみられる。復原口径5.8cm、復原底径5.4cm、器高1.5cmである。同図3は、赤焼き土器環の底部資料。復原底径5.5cm、残存器高1.3cmである。同図4～6は縄文土器で、4・5は同一個体と思われる。地文の撫糸文上に半裁竹管の凹面による2本一組の沈線で幾何学的な文様が施されている。6は地文の縄文上に4本の垂下沈線がみられ、うち並行する2本間の縄文は磨消されている。4・5は前期後半、6は後期前葉と思われる。同図7～21、23～45、第14図1～6は、弥生土器の破片資料である。7～14・16は壺の口縁部や頸部辺りの破片で、

第3章 調査報告



第13図 第1トレンチ出土遺物(1)



第14図 第1トレンチ出土遺物(2)

7・8・11は1本引きの沈線で弧線文と横線文、9・10・12・14は2本一組の沈線で連弧文、13は3本一組の沈線で連弧文、16は2本一組の沈線と櫛描沈線で連弧文と横線文が施されている。12の口縁部は幅状に折り返され、口端に捺糸文もみられる。15は壺の口縁部片で、口辺に連続する指頭瓦筋が施されている。17も、壺の口縁部片である。無文部を区切る沈線の下端に粘土紐を貼付けて、棒状工具により縦位の連続するスリットを入れている。口端には捺糸文?も施されている。18・19は壺ないし甕の胴部片で、同一個体と思われる。ともに横位並行する2本の太沈線により区画された上下に楕円形や弧状の区画文がみられ、区画外の縄文は磨消されている。20は、受け口状の壺口縁部片。直立する頸部は無文で、それより上は細密な縄文が施されている。21も壺の口縁部片で、下端には折返し段がみられる。23～44は地文のみがみられる胴部ないし体部片で、23～32・41・44は縄文(23は直前段多条、41・44は附加条)、他は捺糸文である。45は蓋で、天井周縁から器壁にかけて斜めの貫通孔がみられる。第14図1～6は底部資料で、2は捺糸文、他は縄文が施されている。7・8・11・20は中期中～後葉、9～19は後期前～中葉の所産と思われる。第13図22は、土師器有段口縁壺の段部と考えた破片である。段の外面はキサミが施され、上はナデ、下はミガキ、内面は横方向のナデが施されている。

第2トレンチ(第15・16図、図版5・9・10)

想定主軸線に直交する後方部想定中心線上の墳頂東端付近から東斜面を経て、傾斜が変わり墳丘外と推定される緩斜面にかけて設定したトレンチで、後述する後方部西側の第3トレンチと正対する位置にある。当初は、幅約2.0m、長さ約12.0mの範囲を縄張りしたが、調査途中で墳丘面全体が想定していた位置よりかなり西に寄ることが判明し、複数回西側に拡張したため、長さは約16.0mとなった。また、トレンチ東端近くの北壁沿いの立木部分は調査できなかったことから、最終的な調査面積は約31.3m²となった。調査前は、墳頂東端付近と認識していた地点は神社の敷地として整地されたとみられる平坦面の東端付近にあたり、そこから続く東斜面は37°前後の傾斜で下がり、標高240.7m付近から東側は墳丘外と推定される斜面が10°前後の緩い傾斜で続いていた。

調査は、第1トレンチと同様に、まず周溝の有無を確認するため、墳丘外と推定される緩斜面の掘り下げを先行し、その後、斜面部と墳頂部へ移行した。墳丘外と推定される緩斜面では、1層と後述する斜面部の調査により8層となった黒褐色土を54～90cm掘り下げると、部分的に堆積する漸移層を挟んで砂礫を含む黄橙色の地山層が露出した。この地山層は、緩い傾斜でトレンチ東端近くまで一様に続き、ここでは1・2号遺構と倒木跡に切られたビットを検出したが、第1トレンチと同様に周溝のような大

第3章 調査報告

きな落ち込みは確認できなかった。1号遺構は、トレンチ東端から西へ6.5m前後のところに位置し、南と北がトレンチ外へ抜ける南北方向の溝跡である。北壁下を掘り下げて断面を観察すると、地山層から掘り込まれていることから、古墳築造に関係する遺構の可能性がある。検出面の幅は30～36cm、深さは約21cmで、堆積土は黒褐色土の単層であった。2号遺構は、トレンチ東端に位置する。北・東・南がトレンチ外へ抜けるため全容は不明であるが、西側の遺構ラインは北壁から入り込み、南約1.5mの地点で90°前後西に向きを変えて南壁外へ抜けている。遺構の範囲は、北壁下で約2.0m、南壁下で約2.5mを測り、深さは20cm前後である。底面には、幅30～34cm、深さが3cm前後の南北方向の溝状の掘り込みがみられた。この遺構は、8層から掘り込まれていることが北壁断面で確認できたことから、古墳より新しい時期に掘削された可能性が高い。なお、第2回懇談会の委員現地調査の際に、この遺構は自然地形の窪みではないかとの意見もいただいたことから、次年度以降の調査では拡張などを行い、改めて検討することが必要と思われる。

斜面部では、予想をはるかに超える分厚い堆積土に阻まれ調査が難航した。当初は、1号遺構東側の堆積土の状況から1層の下に黒褐色土が現れ、これを取り除くと墳丘盛土や地山層などが露出すると予想し、主に移植ゴテを使って掘り下げていた。しかし、70cm前後掘り下げて1層に似た暗褐色土が続き、掘削方法の変更が必要となった。結局、現地調査に訪れた菊地委員と柳沼委員の助言に基づき、北と南両壁下を断ち割るように芝ジョレンで一定程度深く掘り下げ、断面観察後その深さまで一気に掘り下げるという作業に切り替え、複数回これを繰り返した。その結果、墳頂東端付近と認識していた地点とそこから続く斜面は、1.5～2.5mの堆積土の下が東側の緩斜面と同様の地山層であったことから、墳丘斜面はかなり西に寄っていることが明らかとなった。このため、トレンチを西に拡張しながら、さらに掘り込みを継続すると、現斜面から墳丘側に3m以上入り込んだ位置で、標高241.5m辺りを境として上方が黄白色粘土混じりの暗褐色土や黄褐色土と黒褐色の互層状の堆積層、下方が黒褐色土の墳丘斜面を検出した。この時点で、黄白色粘土混じりの暗褐色土や互層状の堆積層は墳丘盛土、黒褐色土は旧表土層と認識できたが、黒褐色土から地山層への移行部分に傾斜変化がみられず、墳端を確定するまでには至らなかった。そこで、1号トレンチと同様に北壁下にサブトレンチを入れて、墳丘盛土下まで地山層の変化を追ったところ、標高240.8m辺りで約22cmの立ち上がりが見られ、南壁下に入れたサブトレンチでも同様なことが確認できたことから、この立ち上がりの下端が墳端と判断した。したがって、墳端から高さ0.7m前後、斜距離で1.2m前後の範囲の墳丘面は地山層と旧表土層を削って成形したことが明らかとなった。なお、墳端の東1.4～1.6mの範囲は比較的平坦で、その東側は10～20°前後の傾斜に変わることから、東側墳端の外側には一定範囲で平坦面が作出された可能性がある。また、本トレンチでは、他のトレンチではみられない分厚い堆積土を確認したが、斜面部の1層（東側の緩斜面に堆積する1層とは分離できなかった）と黄褐色や黄白色粘土ブロックをそれぞれ一定量含み、1層に類似する色調の2～7層は、弥生土器から近代の陶磁器類まで混じって出土していることから、かなり新しい時期に人為的に動かされた土の可能性が高く、具体的には神社の敷地造成時に広い平坦面を確保するため、墳丘を削った土を東斜面に押し出したものと考えている。

墳丘斜面は、墳頂付近が大小の擾乱により壊され、北壁断面では盛土や旧表土層の流失などによる凹凸がかなりみられるが、段梁を示すような傾斜変化は確認できなかった。墳端から旧表土層の末端まで



第15図 第2トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図

第2トレンチ

- 1 陶褐色土 (粘性・しまり弱。灰表土層で木組の埋人が著しい。現代陶磁器面上。灰性粘土含む。)
- 2 陶褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色粘土層・ブロック少量含む。陶褐色砂礫少量含む。)
- 3 陶褐色土 (粘性・しまり弱。色調より粘土・黄白色土層・ブロック少量含む。)
- 4 陶褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色土・ブロック少量含む。)
- 5 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄白色・黄褐色粘土層・ブロック少量含む。)
- 6 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色土層・ブロック少量含む。)
- 7 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色土層・ブロック少量含む。)
- 8 埋瓦土 (粘性・しまり弱。Fが少量含む。前面下部から前面にかけて含有量多くなる。)
- 9 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色粘土層・ブロック少量含む。)
- 10 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色土層・ブロック少量含む。径5mm未満の褐色砂礫少量含む。)
- 11 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色土層・ブロック少量含む。径5mm未満の褐色砂礫少量含む。)
- 12 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色土層・ブロック少量含む。径5mm未満の褐色砂礫少量含む。)
- 13 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色土層少量含む。埋瓦土層。)
- 14 埋瓦土 (粘性・しまり弱。陶褐色土層・泥質・ミモ少量含む。)
- 15 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色砂礫少量含む。)

第2トレンチ1号遺構

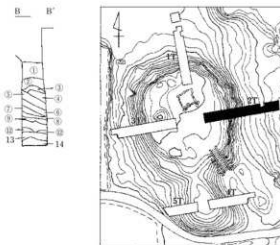
- ① 埋瓦土 (粘性・しまり弱。径5mm未満の褐色砂礫少量含む。)

第2トレンチ2号遺構

- ① 埋瓦土 (粘性・しまり弱。Fが少量含む。)
- ② 埋瓦土 (粘性・しまり弱。径5mm未満の褐色砂礫少量含む。Fが少量含む。)

埋瓦土層

- ① 埋瓦土 (粘性弱・しまりやや強。黄白色粘土・ブロック少量含む。)
- ② 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色・黄白色粘土・ブロック少量含む。)
- ③ 埋瓦土 (粘性・しまり弱。くすんだ黄褐色砂礫土が主体で、埋瓦土・ブロック少量含む。)
- ④ 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色・黄白色粘土層・ブロック少量含む。)
- ⑤ 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色粘土・埋瓦土の混在で、埋瓦土が主体。)
- ⑥ 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色粘土・埋瓦土の混在で、埋瓦土が主体。)
- ⑦ 埋瓦土 (⑤と同質上。)
- ⑧ 埋瓦土 (⑤と同質上。)
- ⑨ 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色粘土・埋瓦土・砂礫土少量含む。)
- ⑩ 埋瓦土 (粘性・しまり弱。黄褐色粘土・少量含む。)
- ⑪ 埋瓦土 (⑤と同質上。)



0 4m (1/800)

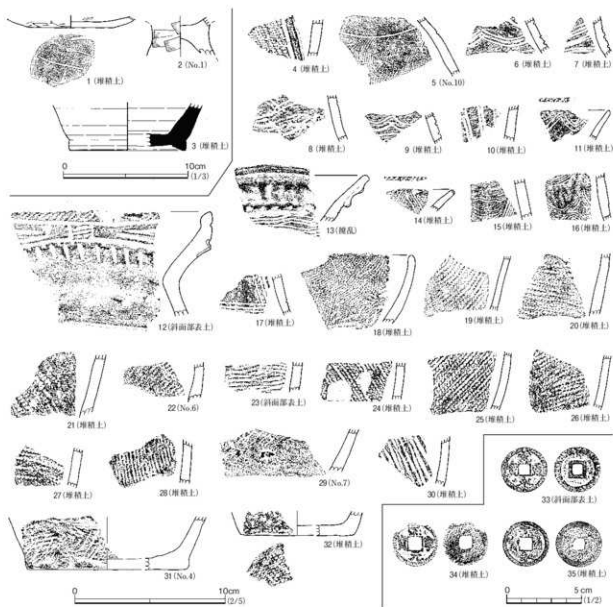
が71°前後、それより上は35~46°の傾斜で墳頂部へ続いていた。盛土は、北壁下に入れたサブトレンチの北・西断面で①から⑫まで確認した。これらは概ね黄褐色系の混合土と黒褐色系の混合土を交互に積んだ状態であったが、①のみは黄白色粘土ブロックを多量に含み、他と色調や土質が異なっていた。また、①~③は比較的レベルに積まれていたが、厚みの少ない④~⑫は北に向かって傾斜していた。

墳頂東端付近は、墳丘斜面と同様に想定していた地点から3m以上墳丘側に寄った位置で検出した。1層を14~30cm掘り下げると、墳丘斜面に向かって緩く傾斜する黄白色粘土ブロックを多量に含む褐色の盛土が露出したが、北壁沿いや中央から南壁にかけては大きく攪乱を受けていた。標高240.4m辺りに斜面に移行するような傾斜変化がみられることから、この部分が墳頂東端と考えた。なお、墳丘斜面のサブトレンチで検出した最上層の盛土⑩は墳頂の盛土に類似することから、墳頂から一定の範囲は黄白粘土を主体とする混合土で仕上げられている可能性が高い。

遺物は、91点出土している。その内訳は、縄文土器1点、弥生土器45点、土師器38点、須恵器1点、赤焼き土器3点、銭貨3点で、この内、出土位置を記録したものは弥生土器6点、土師器3点である。古墳に関係する資料としては、焼成前穿孔とみられる土師器底部片が2点出土しているが、これらは小破片のため図化できなかった。35点図化した。

第16図1は、ロクロ土師器杯の底部片である。外面は体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施され、外底面には2条の擦痕もみられる。復原底径6.6cmである。同図2は、土師器高杯の脚部片である。外面に横方向のヘラナデが施されている。残存器高3.2cmである。同図3は、須恵器長頸瓶の底部片と思われる。断面三角形の高台が貼付けられている。復原底径9.2cm、残存器高3.7cmである。同図4は第13図6と同一個体と思われる縄文土器片である。地文の縄文上に並行する2本の垂下沈線がみられ、沈線間の縄文は磨消されている。同図5~32は、弥生土器の破片資料である。5は壺の胴部上半の破片で、地文の縄文上に弧状沈線がめぐり、上部の縄文は磨消されている。6~10は、壺の頸部辺りの破片である。2本一組の沈線で6・8・9は連弧文、7は連弧文と横線文、10は縦線文が施され、8には連弧文の下に附加条縄文がみられる。11は、壺の口縁部片である。2本一組の沈線で波状文が施され、口端には縄文?もみられる。12は、壺ないし甕の口縁部から胴部上半の資料である。口縁部は受け口状で、口端直下をめぐる沈線が上向きの緩い弧状であることから小波状を呈する可能性もある。口端直下及び下端をめぐる沈線とこれらを区切る縦位2本の沈線により口縁部は3つに区画され、縦位沈線の両側の区画内部にはそれぞれ片側の端部が交わるような2本の斜位沈線が施されている。また、下端をめぐる沈線から外傾する頸部の上端にかけては、竹管状工具の端部による沈線下端への刺突と同一工具による頸部上端への側面押捺により、広義の交互刺突文が施されている。口端と直下の沈線の間や縦位沈線間、斜位沈線間には縄文が充填され、頸部から胴部上半は無文帯としてゐる。13は、幅広い折返しを持つ壺の口縁部片である。口端直下と折返し部の末端は突帯状に肥厚し、それらの間にできた凹部と末端の肥厚部分には連続する指頭押捺がみられる。頸部は、3本一組の沈線で波状文が施されている。14~16は壺の口縁部片や頸部辺りの破片である。いずれも指捺沈線で、14は山形文、15は斜線文と波状文、16は波状文が施されている。14の口端には縄文も施されている。17は、壺の頸部辺りの破片である。3本一組の沈線で横線文と斜線文が施されている。18は受け口状の壺口縁部片で、全面に細密な縄文が施されている。19~30は地文のみがみられる胴部ないし体部片で、19~23

第3章 調査報告

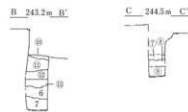
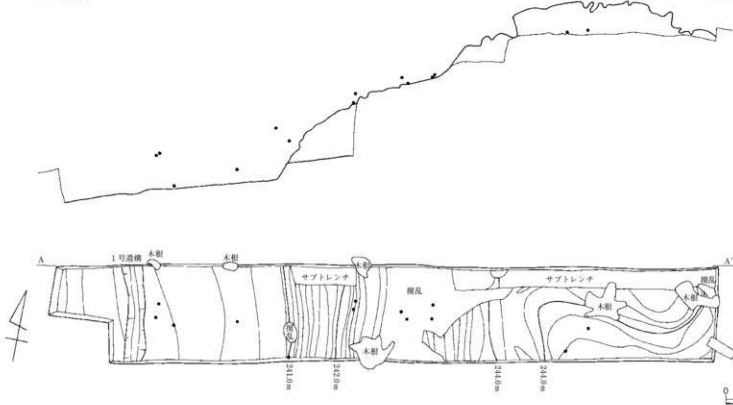
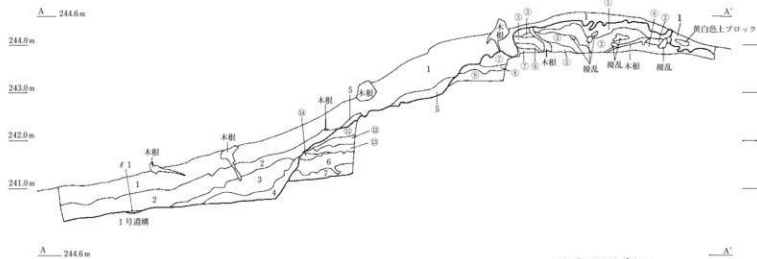
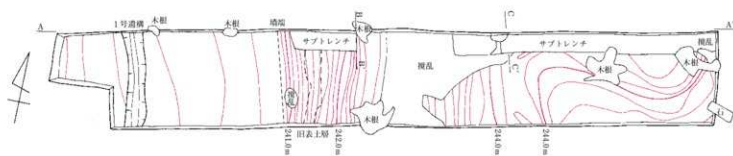


第16図 第2トレンチ出土遺物

は縄文、24～30は捺糸文が施されている。31・32は底部資料で、31は捺糸文、32は外底面に網代痕がみられる。弥生土器のうち、5・18は中期中葉、6～13・17は後期前～中葉、14～16は後期後葉の所産と思われる。第16図33～35は銭貨で、33・35は寛永通宝、34は北末銭の熙寧元宝（初鑄1068年）である。寛永通宝はともに1697年以降に鑄造された新寛永銭と呼ばれるものである。

第3トレンチ（第17・18図、図版6・9・10）

想定主軸線に直交する後方部想定中心線上の墳頂西端寄りから西斜面を経て、傾斜が変わり墳丘外と推定される緩斜面上にかけて設定したトレンチで、前述した後方部東側の第2トレンチと正対する位置にある。当初は、幅約2.0m、長さ約13.9mの範囲を縄張りしたが、西端付近の立木部分は調査できなかったことから、最終的な調査面積は約25.6㎡となった。調査前は、墳頂西端寄りが基礎石列の西側を



第3トレンチ

- 1 暗黒褐色土 (粘性・しまり強。埋戻土層で木根の侵入が著しい。炭化粒微量含む。)
- 2 暗褐色土 (粘性・しまり強。前面下部に向かって色調明るくなる。F.P少量含む。)
- 3 褐色土 (粘性・しまりやや強。F.P微量含む。)
- 4 灰褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色土粒微量含む。径5mm未満の礫微量含む。)
- 5 黄褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色土ブロック・黄褐色土ブロック少量含む。盛土流出上。)
- 6 埋戻褐色土 (粘性・しまり強。黄褐色土粒微量含む。埋戻土層。)
- 7 褐色土 (粘性・しまり弱。沼沢(ハス)礫微量含む。黄褐色土粒微量含む。)

第3トレンチ1号遺構

- #1 埋戻褐色土 (粘性・しまり弱。F.P極微量含む。)

埋戻盛土

- ① 褐色土 (粘性弱・しまり強。黄白色粘土ブロック少量含む。)
- ② 黄白色土 (粘性弱・しまり強。黄白色粘土が主体。褐色土ブロック少量含む。)
- ③ 褐色土 (粘性弱・しまりやや強。褐色土・埋戻褐色土・黄白色粘土の混土で、褐色土が主体。)
- ④ 埋戻褐色土 (粘性弱・しまりやや強。黄白色土ブロック多量含む。)
- ⑤ 褐色土 (粘性弱・しまり強。黄白色粘土ブロック。黄褐色土ブロック多量含む。)
- ⑥ 埋戻褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色土ブロック少量含む。)
- ⑦ 暗黒褐色土 (粘性弱・しまりやや強。くすんだ黄褐色土が主体で、埋戻褐色土・褐色土ブロック多量含む。)
- ⑧ 埋戻褐色土 (粘性弱・しまり弱。くすんだ黄褐色土と埋戻褐色土の混土で、黄褐色土が主体。)
- ⑨ 黄白色土 (粘性弱・しまり強。黄白色粘土が主体。)
- ⑩ 埋戻褐色土 (粘性・しまり弱。くすんだ黄褐色土粒・ブロック少量含む。)
- ⑪ 埋戻褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色土粒・ブロック多量含む。)
- ⑫ 褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色土粒・ブロック多量含む。)



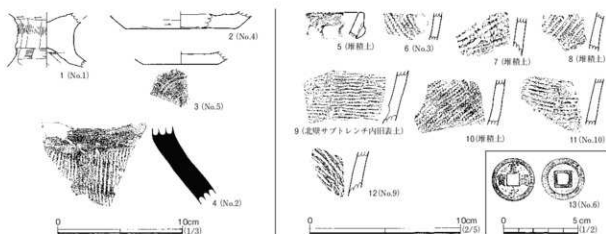
第17図 第3トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図

南北に延びる土塁のような高まりの南端にあたり、そこから続く斜面は30°前後の傾斜で下がり、標高242.1m辺りから西側は墳丘外と推定される斜面が10~20°前後の緩い傾斜で続いていた。

調査は、第1・2トレンチと同様に周溝の有無を確認するため、墳丘外と推定される緩斜面の掘り下げから開始し、徐々に墳丘斜面や墳頂部に移行した。墳丘外と推定される緩斜面では、1・2層を65~85cm掘り下げると西端から東へ約2.3mの範囲に砂礫を含む暗黄褐色の地山層が露出した。また、その東側では、1・2層の下に3層と4層がさらに堆積しており、これらを含めて85~133cm掘り下げて同様の地山層を検出した。この地山層は、トレンチ西端に向かって10°前後の緩い傾斜で一様に下がっており、現地表面で30cm以上低くなるトレンチ外西側の畑地に立ち上がりを想定できないことから、ここでも周溝のような掘り込みはないものと判断した。西端寄りで南北に延びる1号遺構を検出した。この遺構は、南と北がトレンチ外へ抜ける溝跡である。誤って完掘してしまっただが、北と南の両壁断面を観察すると地山層から掘り込まれていることから、古墳築造に関係する遺構の可能性がある。溝跡は検出面の幅が32~44cm、深が5~9cmで、堆積土は黒褐色の単層であった。

斜面部では、全体的に堆積する1層、下部に堆積する2~4層、中腹の攪乱坑などに部分的に堆積する5層まで25~113cm掘り下げると、標高241.6m前後を境として、上方に黄白色粘土や黒褐色土混じりの暗黄褐色土や褐色土、下方に黒褐色土が露出し、さらに黒褐色土の下に褐色土と黄褐色ロームを確認した。この時点で、これらはいずれも墳丘面の構成層と認識したが、さらにそのこと明確にするため、斜面下部の北壁下にサブトレンチを入れて断面で各層の観察を行った。その結果、上方の黄白色粘土や黒褐色土混じりの暗黄褐色土や褐色土は墳丘盛土、その下の黒褐色土（6層）は墳丘盛土下に堆積する旧表土層、最も下の黄褐色ロームは緩斜面で確認した地山層の上に堆積する別の地山層であることが判明した。また、旧表土層と黄褐色ロームの間の褐色土（7層）は、沼沢バミスを含むことから縄文時代頃の自然堆積層と判断した。したがって、墳端は、黄褐色ロームから緩斜面の地山層に移行するL字状の傾斜変換部と考えられ、この部分の標高は240.8m前後であることから、墳端から高さ0.8m前後、斜距離で1m前後の墳丘面は、黄褐色ロームから旧表土層までを削って成形したことが明らかとなった。

墳丘斜面は、中腹から墳頂にかけて大きな攪乱坑がみられるが、段築を示すような傾斜変化は確認できなかった。墳端から旧表土層までは58°前後、それより上の盛土部分は33°前後の傾斜で墳頂へ続い



第18図 第3トレンチ出土遺物

ていた。盛土は、北壁下のサブトレンチで㊸から㊻まで5枚確認した。これらは主に黄褐色土や黒褐色土の含有量が異なる褐色系の土を積んだ状態で、それぞれの厚みにばらつきがあった。

土塁のような高まりの南端部にあたる墳頂西端寄りでは、1層を5～25cm掘り下げると、木根の攪乱などにより表面がかなり荒れた状態で褐色の盛土が露出した。この盛土は、神社の敷地造成時に敷地と外側を区切るために盛られた可能性もあったことから、北壁下にサブトレンチを入れて断ち割り調査を行った。その結果、70cm前後の深さまでの間に㊸から㊻を検出したが、これらは自然堆積層とみられる間層を挟まず連続して積まれていたことから、古墳築造時の盛土であることが再確認できた。したがって、1号トレンチと同様に神社の敷地造成時に、削平されずに残った墳丘盛土が、土塁のような高まりとして遺存したのと考えられる。なお、墳頂西端については、位置を特定することはできなかった。

遺物は、64点出土している。その内訳は、弥生土器24点、土師器34点、須恵器1点、赤焼き土器4点、銭貨1点で、この内、出土位置を記録したものは弥生土器6点、土師器4点、赤焼き土器1点、銭貨1点である。土師器は、坏・甕・鉢などの小片が比較的多く出土しているが、古墳に関係する資料は見当たらなかった。13点図化した。

第18図1は、土師器高坏の脚部片である。外面はわずかに残る坏部にヘラケズリ、脚部にヘラナデ、内面は脚部にヘラナデが施されている。坏部内面は黒色処理らしい。残存高4.2cmである。同図2は土師器甕の底部片、同図3は赤焼き土器小皿の底部片である。同図4は須恵器甕の胴部上半の破片で、外面に平行タキ痕が確認できる。同図5～12は、弥生土器の破片資料である。5は壺の口縁部片で、下端に隆帯を貼り付け、その上に連続する指頭押捺を加えている。6～12は、地文のみがみられる胴部ないし体部の破片で、6・7・8・10は縄文、9・11・12は撫糸文が施されている。同図13は寛永通宝で、1697年以降に鑄造された新寛永銭と呼ばれるものである。

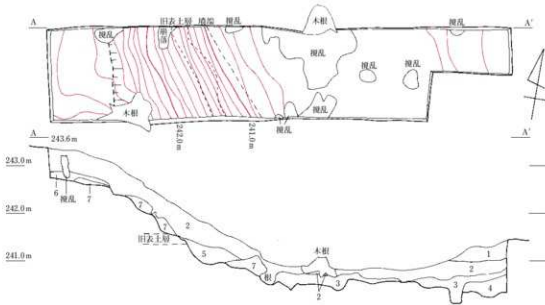
第2節 前方部斜面

概要

後方部と同様に、周溝の確認を含めて前方部東西両側の墳頂を確定し、併せてそれぞれの斜面における盛土の状態を把握するため、東斜面に第4トレンチ、西斜面に第5トレンチを設定した。両トレンチは、想定主軸線に直交する東西線上で正対する位置にある。なお、現況で東側墳頂に沿うように南北に延びる窪地状の地形は、南側の農道から「菅布神社」に向かう参道の名残である。前方部東側のラインが西側のそれに比べて「バチ形」にみえるのは、この参道の造成が影響しているものとみられる。

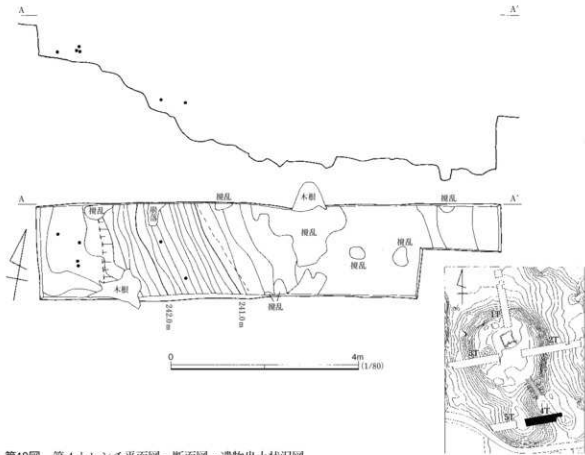
第4トレンチ (第19・20図、図版7・9・10)

想定主軸線に直交する東西線上の墳頂東端付近から東斜面を経て、傾斜が変わり墳丘外と推定される旧神社参道にかけて設定したトレンチである。当初は、幅約2.0m、長さ約8.1mの範囲で調査を進めていたが、第2回懇談会の委員現地調査時の指導により、幅を半分程度に減らして旧神社参道東側の高まりまで東端を拡張したため、最終的な調査面積は約17.9㎡となった。調査前は、墳頂東端付近がほぼ平坦で、そこから続く東斜面は32°前後の傾斜で下がり、標高241.2m辺りから東側は旧神社参道の平坦



第4トレンチ

1. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。木根の混入が著しい。(5-10mmの砂少量含む。))
2. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。木根の混入が著しい。炭化粒微量含む。)
3. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色砂礫ブロック少量含む。)
4. 黒褐色土 (粘性・しまり弱。FP少量含む。)
5. 黒褐色土 (粘性・しまり弱。木根の混入が著しい。FPを微量含む。)
6. 黒褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色土ブロック少量含む。(5mm未満の砂礫少量含む。盛土流出上。))
7. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロック少量含む。盛土流出上。)

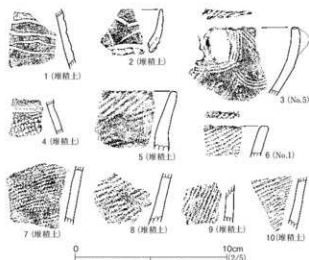


第19図 第4トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図

第3章 調査報告

面が3m前後続き、さらにその東側は平坦面との比高が70cm前後の高まりとなっていた。

調査は、第1～3トレンチと同様に周溝の有無を確認するため、旧神社参道の平坦面の掘り下げからはじめ、その後斜面部や墳頂東端付近に移行し、最後に拡張部を掘り下げた。旧神社参道の平坦面では、拡張部の堆積土との関係から2・3層とした暗褐色土を25～35cm掘り下げると、砂礫を含む黄褐色の地山層が露出した。この地山層は、木根による大小の擾乱坑が多数みられるもの、これらを除けばほぼ平坦に広がり、ここでも周溝とみられるような掘り込みは確認できなかった。



第20図 第4トレンチ出土遺物

斜面部では、全面に堆積する2層と部分堆積の5・7層を45～76cm掘り下げると、標高241.5m辺りを境として上方に黒褐色混合土と黄褐色混合土による互層状堆積層、下方に黒褐色土と黄褐色ロームが露出した。これらは、他のトレンチの墳丘斜面と同様な堆積状況であったことから、上方の互層状堆積層は墳丘盛土、下方の黒褐色土は旧表土層、その下の黄褐色ロームは平坦面の地山層の上に堆積する別の地山層であると判断した。また、標高241.0mと240.9mの間には、斜面から平坦面に移行するような地山層の傾斜変化がみられることから、この部分を墳端と考えた。したがって、墳端から高さ60cm前後、斜距離で0.8m前後の墳丘面は、旧表土層から地山層までを削って成形したと思われる。

墳丘斜面は、墳頂付近から中腹にかけて盛土の流失や木根の擾乱坑による凹凸がかなりみられるが、段差を示すような傾斜変化は確認できなかった。墳端から旧表土層までは45°前後、それより上の盛土部分では36°前後の傾斜で墳頂へ続いていた。墳頂東端付近は、2・6・7層を51～65cm掘り下げると黄白色粘土や黒褐色土混じりの黄褐色盛土が露出した。この盛土は、後述する第5トレンチ東端の盛土よりも20cm前後低い位置で検出したことから、墳頂は東に傾斜している可能性がある。標高242.5mと242.6mの間に斜面へ移行するような傾斜変化がみられることから、この部分を墳頂東端と判断した。

拡張部の高まりでは、1～4層を45～120cm掘り下げると、平坦面から続く地山層が露出した。この地山層は、木根の擾乱による凹凸がみられるが、東に向かって緩く傾斜していた。なお、高まり自体は、旧神社参道の造成に伴う地面の掘削により相対的に高くなった部分と思われるが、1層の暗褐色土と2層の暗褐色土がかなり類似していることから、造成時の残土を積んだ部分が1層の可能性もある。

遺物は、22点出土している。その内訳は、弥生土器18点、土師器4点で、この内、出土位置を記録したものは弥生土器5点、土師器1点である。土師器は坏・甕などの小片が出土しているが、古墳に關係する資料は見当たらなかった。弥生土器10点を図化した。

第20図1は壺の頸部辺りの破片で、1本引きの沈線で横線文が4条施されている。同図2は、受け口状の壺ないし甕の口縁部片である。下端は粘土紐の貼り付けにより段を有する。1本引きの沈線で上下2列に弧線文が施され、段直上には横位の沈線とこれに沿う竹管状工具による連続刺突文がみられる。同図3は器種不明の口縁部片で、口端直下に2個一対の？の小突起を貼り付け、これを避けるように3本

一組の沈線で上下2段に山形文が施されている。平坦な口端には縄文が施され、左側の突起の脇には器壁を貫通する小孔がみられる。同図4は頸部と胴部を楕円沈線で区画した破片で、胴部には縄文が施されている。同図5・6は地文の縄文のみがみられる口縁部片で、5は口端にも縄文が施されている。同図7・8は縄文、9・10は燃糸文が施された胴部片である。1は中期、2～6は後期の所産と思われる。

第5 トレンチ (第21・22 図、図版8・9・10)

想定主軸線に直交する東西線上の墳頂西端付近から、西斜面にかけて設定したトレンチである。幅約2.0m、長さ約7.1mの範囲を縄張りしたが、西端は農道に制約されたため、調査面積は約12.1m²となった。調査前は、墳頂西端付近がほぼ平坦で、そこから続く西斜面は18°前後の傾斜で下がっていた。

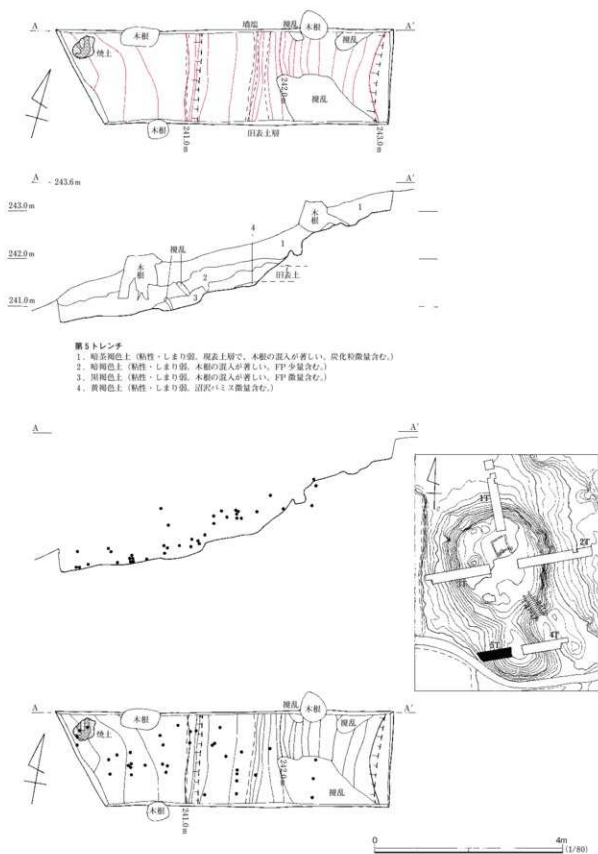
調査は、場所を区切らずトレンチ全体で同時並行的に進めた。全面に堆積する1層、斜面下部に堆積する2～4層まで30～98cm掘り下げると、標高241.8m前後を境として上方に黄白色粘土ブロック混じりの暗黄褐色土、下方に黒褐色土と黄褐色ロームが露出した。これらは、他のトレンチの墳丘斜面と同様の堆積状況であったことから、上方の暗黄褐色土は墳丘盛土、下方の黒褐色土は旧表土層、その下の黄褐色ロームは地山層と判断した。また、標高241.4m付近には、墳丘斜面とその外側を区切るような地山層の傾斜変化がみられることから、この部分を墳端と判断した。したがって、墳端から高さ40cm前後、斜距離で0.5m前後の範囲の墳丘面は、旧表土層から地山層までを削って成形したと考えられる。なお、墳端の西1.0m前後の範囲は比較的平坦な地山層で、人為的に掘削されたとみられる20cm前後の段差を経てさらに西側へ緩い傾斜で続いていることから、この辺りの墳端の外側には一定の幅でテラスのような平坦面が作出されている可能性がある。

墳丘斜面は、中央から南壁面にかけて木根の攪乱により大きく壊されているが、段築を示すような傾斜変化は確認できなかった。墳端から標高242.5m辺りまでが42°前後、それより上では20°前後の傾斜で墳頂へ続いている。墳頂東端は、ほぼ平坦になる標高243.0m辺りと考えている。

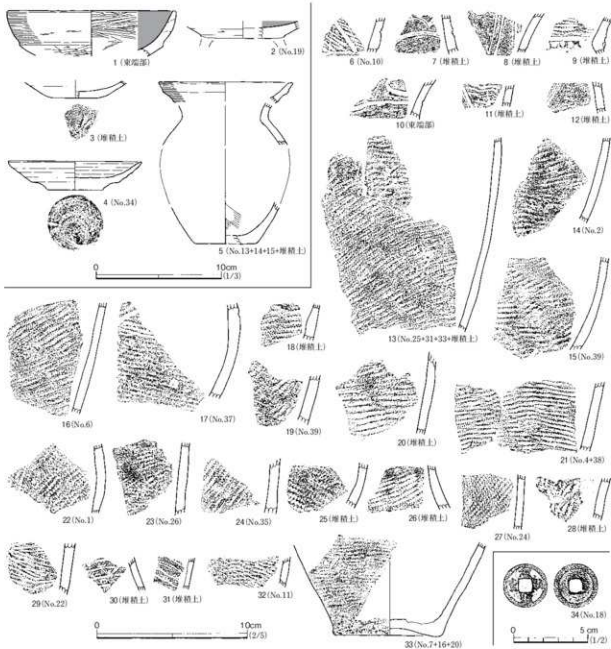
遺物は、76点出土している。その内訳は、縄文土器1点、弥生土器65点、土師器8点、かわらけ1点、銭貨1点で、この内、出土位置を記録したものは弥生土器32点、土師器3点、かわらけ1点、銭貨1点である。土師器は、坏・高台付坏・甕などの小片が出土しているが、古墳に関係すると思われる資料は見当たらなかった。34点を図化した。

第22図1は、外面にのみ段がみられる有段丸底の土師器坏片である。外面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。復原口径13.2cm、残存器高3.6cmである。同図2は、高台部が剥離したロクロ土師器高台付坏の底部片である。内面は黒色処理が施され、外面はわずかに回転ヘラケズリが確認できる。復原底径6.8cmである。同図3は、ロクロ土師器坏の底部片である。内面は黒色処理が施され、外底面は回転糸切り痕がみられる。復原底径4.6cm、残存器高1.2cmである。同図4は、ロクロかわらけ小皿である。厚手の底部から外傾して口縁部に至る器形で、底部の切り離しは回転糸切りである。復原口径10.7cm、底径4.5cm、器高2.3cmである。同図5は、赤彩された口縁部・頸部・底部の小破片からあえて器形を復原した。無文の弥生土器広口壺で、口縁部の外面は横方向のナデ、底部の内面は斜位のナデが施されている。同図6は縄文土器片で、地文の燃糸文上に半葎竹管の凹面による横位・斜位の沈線文がみられる。同図7～33は、弥生土器の破片資料である。7・8は

第3章 調査報告



第21図 第5トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図



第22図 第5トレンチ出土遺物

壺の頸部辺りの破片で、2本一組の沈線により7は連弧文、8は縦線文が施されている。9・10は壺ないし甕の口縁部下端の破片で、9は横走縄文帯の下端に横位の沈線文とこれに沿う刺突文がみられ、10は横位と精円状の沈線文が確認できる。11・12は壺の頸部辺りの破片で、11は斜位の沈線文と3本一組の沈線による波状文、12は柵縹沈線による斜線文が確認できる。17は胴部片で、地文の縄文上にわずかに沈線文が確認できる。13～16・18～32は地文のみが施された胴部ないし体部の破片で、13～16は同一個体と思われる。13～28・31は縄文、29・30・32は捻糸文で、32は回転方向を違えることで一部網目状としている。33は上げ底気味の底部片で、地文の縄文のみがみられる。7～11は後期前～中葉、12は後期後葉の所産と思われる。同図34は、北宋銭の元祐通宝（初鑄1086年）であろう。

第4章 まとめ

正直古墳群の第3次発掘調査は、前方後方墳とされる35号墳の周溝の確認を含めて前方部と後方部の東西両側の墳端と後方部北側の墳端を確定し、併せて盛土の状態を把握することが主な目的であった。ここでは、各トレンチの調査成果を踏まえ、改めて明らかとなった事項を記載する。

まず、周溝の有無であるが、設定した5本のトレンチのうち、第5トレンチを除いて見かけの位置で墳丘外と推定される部分について、できる限り外側に広げて調査を行った。その結果、いずれのトレンチでも一定の深さで地山層を検出し、それらが一律にトレンチ外端まで続き、立ち上がらないことを確認した。したがって、周溝はめぐっていなかったと考えるのが妥当と思われる。

各所の墳端は、第1・2トレンチで検出に手間取ったが、他のトレンチでは墳丘斜面下端とその外側に比較的明瞭な傾斜変化がみられことから、これらの部分がそれにあたると判断した。どの地点でも旧表土層と地山層を削って作出しているが、第1～4トレンチでは標高240.8～241.1mに墳端があるのに対して第5トレンチでは241.4m前後の高さにあり、この標高差については今後の調査における留意事項と考える。なお、第2トレンチでは、墳丘斜面や墳端を検出するまでに他のトレンチではみられない分厚い堆積土を取り除いたが、この堆積土の多くは後方部墳頂にかつてあった神社の敷地造成時に、広い平坦面を確保するため墳丘を削った際の残土であり、それを東斜面に押し出したものと思われる。また、このことと関連するが、後方部墳頂の北側から西側にかけて鉤の手状に屈曲しながら延びる土塁のような高まりは、第1・3トレンチで断ち割り調査を行った結果、墳丘盛土であることが確認できたことから、神社の敷地造成時に削平を受けずに残った部分と考えられる。

遺物は、弥生土器片が多数を占めていたが、第1トレンチから古墳の築造時期に関わる資料が2点出土した。この内、第13図1は小型の底部穿孔壺？で、底部から胴部にかけて半分ほどが遺存する。そろばん玉を潰したような下彫れの器形で、最大径は底部近くにあり、この部分は外面に稜を形成する。底部は、焼成前にヘラ状工具で粘土を切り取ることで穿孔している。調整は、外面がハケメ、内面は下端がハケメ、それより上はハケメと同一工具によるナデが施されている。全体の器形が不明である上、胴部形が類似する土器も今のところ県内では確認できず、比較検討は難しい。主な器面調整がハケメであることを掲げるとすれば、古墳時代前期の土器群の中でも後出的な要素を持つものと思われるが、詳しい時期は明言できない。したがって、この土器を以って古墳の築造時期を確定するのは難しいと思われる。次年度以降の調査で、新たな資料が出土することを期待したい。

弥生土器については、中期中葉から後期後葉の資料が出土した。いずれの資料も数は少ないが、この中で注目されるのは天王山式以前の後期前半の資料である。第13図9～12・14、第16図6～11、第22図7・8は、2本一組の沈線で連弧文・縦線文・波状文などが施されている。また、第13図13、第16図13・17、第20図3、第22図11は、3本一組の沈線で連弧文・波状文・斜線文などが施されている。前者は浜通り地方の伊勢林前式土器や中村五郎氏が提唱した「油田Y期土器」に、後者は浜通り地方の輪山式土器に類例が求められる。この時期の資料は、郡山市内では初めての発見となった。

写真図版



正直古墳群の位置 (国土地理院の空中写真 1947 米軍空撮)



(1) 正直古墳群・正直B遺跡遠景 (南より)



(2) 正直古墳群・正直B遺跡遠景 (北より)



(1) 正直35号墳遠景(南より)



(2) 正直35号墳全景(上空より・上方北)

図版4



(1) 第1トレンチ全景 (北より)



(2) 第1トレンチ塙頂部盛土断面 (東より)



(3) 第1トレンチ西壁断面 (北東より)



(4) 第1トレンチ斜面部盛土断面 (北より)



(1) 第2トレンチ全景 (東より)



(2) 第2トレンチ北壁断面 (南東より)



(3) 第2トレンチ1号遺構 (南より)



(4) 第2トレンチ斜面部盛土断面 (東より)



(1) 第3トレンチ全景 (西より)



(2) 第3トレンチ墳頂部盛土断面 (南西より)



(3) 第3トレンチ北壁断面 (南西より)



(4) 第3トレンチ斜面部盛土断面 (西より)



(1) 第4トレンチ全景 (東より)



(2) 第5トレンチ全景 (西より)



(1) 第5トレンチ北壁断面 (南西より)



(2) 正直35号墳トレンチ埋戻し後遠景 (西より)



出土遺物 (1)



報告書抄録

ふりがな	しょうじきこふんぐんーだいさんじはつかつちょうさほうこくー							
書名	正直古墳群ー第3次発掘調査報告ー							
副書名								
シリーズ名								
巻次								
シリーズ番号								
編著者	斎藤直子 佐藤常雄 高田 勝							
編集機関	公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター							
所在地	福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田 23 番地							
発行機関	福島県郡山市教育委員会							
所在地	福島県郡山市朝日一丁目 23 番 7 号							
発行年月日	西暦 2020 年 3 月 24 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡					
正直古墳群	福島県郡山市田村町 正直字南・北畑・ 宮前・広町・中平・ 除古・新館・竹ノ内 ほか			37 度 20 分 44 秒	140 度 23 分 45 秒	20190912 ～ 20191216	200 m ² 相当	保存事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
正直古墳群	古墳	古墳時代	正直35号墳 (前方後方墳)	縄文土器 弥生土器 土師器 赤焼き土器 かわらけ 銭貨	5箇所のトレンチ調査により、前方部東西墳端及び後部東西墳端、後部北墳端を確認した。墳丘は、旧表土層と地山層削り出し後、盛土して築造している。周溝と段築は確認できなかった。			

正直古墳群調査保存事業
正直古墳群
—第3次発掘調査報告—

発行日 令和 2 年 3 月 24 日
編集 公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
文化財調査研究センター
〒963-0541 福島県郡山市喜久田町塚之内字畑田23番地
発行 福島県郡山市教育委員会
〒963-8601 福島県郡山市朝日一丁目23番7号
印刷 石橋印刷株式会社
〒963-8041 福島県郡山市富田町字中ノ目47-3

2020